

つぎはぎ

古事記入門



[INTRODUCTION]

『つぎはぎ古事記入門』（PART I, PART II）は古事記イヤーの2012年（古事記完成1300年）にお役立ていただこうと、古事記の概要を38ページにまとめたものです。できるだけ早くしかも正確に作れるよう、信頼できる書籍やWebサイトを引用し、文字通り「つぎはぎ」で仕上げました。これを読んだからといって、決して古事記の「すべて」が分かるわけではありませんが、ツボは押さえたので「だいたい」は分かっていただけだと思います。

古事記のことを、これほど「手軽に、手っ取り早く、しかも無料で」学べる教材は他にはないと思います。ぜひ、最後までお付き合いください。（平成貳拾四年正月廿八日）

[CONTENTS]

PART I.

INTRODUCTION / NOTES / PROLOGUE 古事記とは何か

第Ⅰ章 神代篇（古事記 上つ巻）

PART II.

第Ⅱ章 人代篇（古事記 中つ巻・下つ巻） / EPILOGUE 古事記の成立をめぐって
あとがきにかえて / APPENDIX 奈良県下の記紀ゆかりの地

Written by Norio Tetsuda (鉄田 憲男 奈良まほろばソムリエ友の会事務局長)

[NOTES]

- 第Ⅰ・Ⅱ章の見出しおよび該当ページ番号は、倉野憲司校注『古事記』（岩波文庫）による。なお同書からの引用は、(岩)と略記している
- 武光誠著『図解雑学 古事記と日本書紀』（ナツメ社刊）からの引用は(武)と略記
- 坂本勝監修『図説 地図とあらすじでわかる！ 古事記と日本書紀』（青春新書）からの引用は(坂)
- Webサイトの青空文庫 鈴木三重吉著『古事記物語』からの引用は(鈴)
- 同 Wikipedia（インターネット百科事典）からの引用は(W)
- ※トップ画像(官服姿のせんとかん)は、奈良県の提供による。その他の画像はすべてインプレスジャパン刊『年賀状 DVD-ROM イラスト12000』をアップロードしたもの

[PROLOGUE] 古事記とは何か

岩波文庫『古事記』のカバー解説によると《8世紀初めに成立した現存するわが国最古の歴史書・文学書。数多い口伝えを、天武天皇が稗田阿礼に命じて覚えさせ、元明天皇が太安万侶に書きとめさせたもの。天地開闢に始まり、伊邪那岐命（イザナキノミコト）、伊邪那美命（イザナミノミコト）の国生み神話、須佐之男命（スサノオノミコト）の大蛇退治等、神代より推古天皇に至る皇室の系譜を中心に、わが国古代の神話・伝説・歌謡を広範囲に収録》とある。では「具体的に、どんな内容なのか」ということになる、それを簡潔に記した解説文は、驚くほど少ない。

いろんな本を涉猟（しょうりょう）するうち、やっとドナルド・キーン著（土屋政雄訳）『日本文学の歴史(1)古代・中世篇1』（中央公論社刊）という本を見つけた。日本人の学者より、ニューヨーク生まれ・コロンビア大学名誉教授の解説の方が分かりやすいというのは奇妙な話であるが、以下、約2ページにわたり、古事記に関する要点を抜粋する。この章ではいちいち引用符《》はつけないが、見出し（■を付した部分）を含め、100%引用である。

■日本最古の書物『古事記』は重要な作品

712年に朝廷に献上された『古事記』は、日本最古の書物である。さらに古い記録があったことがその序文に記されているが、その大部分は645年に焼失した。

日本文化史に『古事記』が占める地位はきわめて大きい。単に最古の書物というだけでなく、18世紀以降には神道の聖典として扱われたし、**文化の黎明期における日本人の信仰をうかがい知るには、これが最良の資料である。**

数多くの歌謡を含み、興味深い神話や寓話がちりばめられていることから、今日、この書物は単なる宗教的文書でなく、重要な文学作品ともみなされている。

■問題を含みながらもすばらしい宣長の業績

現在出版されている『古事記』のほとんどは、原文の1字1字に「純粋な大和言葉」の発音を与えている。これは、偉大な国学者**本居宣長（1730～1801年）の読み方**にほぼ従った

ものである。

■素朴で粗削りの美、伝統の宝庫『古事記』

『古事記』を文学作品として読もうとすると、現代人はおそらく困難を感じる。その原因は、比較的短い説話でさえ首尾一貫せず、矛盾が多いこと、そして何よりも冗長であることにある。無数の男神・女神が生まれ、名前を与えられた直後に消え失せて、2度と登場しない。おそらく、各地の氏族の祖先として崇拝されていて、その地方では重要な神々だったと推測できる。『古事記』に見る古代日本人の想像力は、豊かだった反面、緊張の持続が苦手だったのかもしれない。

■他に例をみない神の性行為による国生み

神の性行為による国生みなどはおそらく他に類を見ない。**多くの日本人学者は、この性的結合の「大らかさ」をいい、『古事記』に現れる多くの性行為もみな同様だとしている。**神だけでなく、島をも生むという二柱の神の不思議な能力の結果、日本の支配者は、自分が治める国と血でつながることになった。

イザナギとイザナミは、その数多い子孫ほどには崇拝の対象にはならなかったが、これは不思議なことである。

■「歌心ある武人」ヤマトタケルは日本的英雄の原型

嵐に襲われたヤマトタケルは目がくらみ、これ以後、疲労と孤独にさいなまれる。以前の雄姿は見る影もない。疲れはて、やがて病を得て、『古事記』の中で最もすぐれた歌謡の数編を作ったのち死ぬ。家族が葬式にやってくると、その目の前で、ヤマトタケルは大きな白い鳥になって飛び去る。妻と子は、海を超え、山を超えて鳥を追うがつかまえることはできず、鳥は天高く舞い上がっていく。**アイバン・モリスは 著書 The Nobility of Failure（『高貴なる敗北』）の冒頭でこの説話を取り上げ、ヤマトタケルを日本的英雄の原型だ**とっている。

■文学的面白さに欠ける下巻

下巻の内容は、主として、皇室の誰がどの親族によってどういう理由で殺されたのかの説明である。わけのわからない理由も少なくない。殺人を淡々と記し、最後には歴代天皇の妻子の名をうんざりするほど書き連ねて終わる。

『古事記』が初めて（歴史でなく）文学作品として扱われたのが1925年であることは、倉野（憲司）も認めている。結局、**『古事記』は歴史的文学書、もしくは文学的意図をもった歴史書である**というのが、倉野の結論である。

■『古事記』は日本の文学的表現の源流

『古事記』は、日本の文学的表現のほぼ源流に位置している。

さらに重要なことは、和歌の本質的な役割がすでに『古事記』に見えることである。英雄的な行為をたたえるときはもちろん、高揚した表現が要求される瞬間には、いつでも和歌が作られた。散文の語りの中に和歌を挿入する手法は、こののち千年ものあいだ日本文学の一大特徴となる。

日本という謎は、日本人の情熱をかき立てる。
そして、その謎は『古事記』に始まるのである。



第Ⅰ章 神代篇（古事記 上つ巻）

武光誠著『図解雑学 古事記と日本書紀』（ナツメ社刊）の「『古事記』の構成」によると、《古事記は上・中・下の3巻で構成されている。上巻は「序」と神代の記事、中巻・下巻では皇室の系譜と継承がまとめられている。（中略）「上巻では『古事記』のなりたちと神話を記述」『古事記』の上巻は、まず「序」文から始まる。序文は太安万侶の手によるもので、『古事記』完成時に記された。「序」に続く、上巻での神代の記述は、1つのまとまりを持った神話の体をなしている。『日本書紀』が多くの異伝を併記して公的な史書らしい体裁を整えているのとは比べると、より物語的であるともいえる。また、『日本書紀』と比べて、大国主命を中心とした出雲神話を重点的に紹介している点も特徴である》。

※ご参考：範疇表（西郷信綱著『古事記の世界』岩波新書をもとに作成）

	A	B	C	D	E
甲類	高天原 (天つ神の国)	天つ神 (高天原の神)	伊勢 (大和の東)	日向(ヒムカ。 天孫降臨の地)	大和
乙類	葦原中国 (地上の世界)	国つ神 (地上の神)	出雲 (大和の西)	襲(ソ。大和への抵抗勢力が住む地)	熊野
乙'類	黄泉の国・根の国 (死者の世界)				

別天つ神(ことあまつかみ) 5 柱 (P18)

(STORY) 《世界ができたそもそものはじめ。まず天と地とができあがりますと、それといっしょにわれわれ日本人のいちばんご先祖の、天御中主神（あめのみなかぬしのかみ）とおっしゃる神さまが、天の上の高天原というところへお生まれになりました。そのつぎには高皇産霊神（たかみむすびのかみ）、神産霊神（かみむすびのかみ）のお二方がお生まれになりました。そのときには、天も地もまだしっかり固まりきらないで、両方とも、ただ油を浮かしたように、とろとろになって、くらげのように、ふわりふわりと浮かんでおりました。その中へ、ちょうど葦の芽がはえ出るように、二人の神さまがお生まれになりました。》（鈴）。

天之御中主神(天御中主神)については《その後の事績は全く書かれておらず、「中空神」とも言われる。『記紀』神話が形成される上で創造された観念的な神と考えられ、それには中国の天帝の思想が影響したものと考えられる》(W)。高御産巢日神は高天原系(天つ神)、神産巢日神(神産霊神)は出雲系の神さま(国つ神)なので、両者の間に立って統括する神さまとして、天之御中主神が創造されたのだろう。

神代七代(同)

(STORY)《それからまたお二人、そのつぎには男神(おがみ)女神(めがみ)とお二人ずつ、八人の神さまが、つぎつぎにお生まれになった後に、伊弉諾神(いざなぎのかみ)と伊弉冉神(いざなみのかみ)とおっしゃる男神女神がお生まれになりました》(鈴)。

伊邪那岐命と伊邪那美命(伊弉諾神と伊弉冉神)(P19)

国土の修理固成(同)

(STORY)神は伊邪那岐命と伊邪那美命に《「あの、ふわふわしている地を固めて、日本の国を作りあげよ」とおっしゃって、りっぱな矛(ほこ)を一ふりお授けになりました。それでお二人は、さっそく、天の浮橋という、雲の中に浮かんでいる橋の上へお出ましになって、いただいた矛でもって、下のとろとろしているところをかきまわして、さっとお引きあげになりますと、その矛の刃先についた潮水が、ぽたぽたと下へおちて、それが固まって一つの小さな島になりました》(鈴)。

その島の名前が淤能碁呂島(おのごろじま)である。この島は、淡路島の南の沼島(ぬしま)であるといわれる。沼島は《淡路島の南4.6kmの紀伊水道北西部に浮かぶ兵庫県南あわじ市に属する島》(W)である。

二神の結婚(同)、大八島国の生成(P21)、神々の生成(P22)

(STORY)《お二人はその島へおりていらして、そこへ御殿をたててお住まいになりました。そして、まずいちばんさきに淡路島をおこしらえになり、それから伊予、讃岐、阿波、土佐とつづいた四国の島と、そのつぎには隠岐の島、それから、そのじぶん筑紫(つくし)といった今の九州と、壱岐(いき)、対島、佐渡の三つの島をお作りになりました。そして、いちばんしまいに、とかげの形をした、いちばん大きな本州をおこしらえになって、それに大日本豊秋津島(おおやまととよあきつしま)というお名まえをおつけになりました。これで、淡路の島からかぞえて、すっかりで八つの島ができました。ですからいちばんはじめには、日本のことを、大八島国(おおやしまぐに)と呼び、またの名を豊葦原水穂国(とよあしはらのみずほのくに)とも称(とな)えていました。こうして、いよいよ国ができあがったので、お二人は、こんどはおおぜいの神さまをお生みになりました。それといっしょに、風の神や、海の神や、山の神や、野の神、川の神、火の神をもお生みになりました。ところがおいたわしいことには、伊弉冉神は、そのおしまいの火の神をお生みになるときに、おからだにおやけどをなすって、そのためにとうとうおかくれになりました》(鈴)。

「山の神」は、古事記には「大山津見神（オオヤマツミノカミ）」という名前で出ている。《オオヤマツミ（大山積神、大山津見神、大山祇神）は、日本神話に登場する神。別名 和多志大神。（中略） 神名の「ツ」は「の」、「ミ」は神霊の意なので、「オオヤマツミ」は「大いなる山の神」という意味となる。別名の和多志大神の「わた」は海の高語で、海の神を表す。すなわち、山、海の両方を司る神ということになる》(W)。大山津見神は、各地の山口神社などに祀られている。奈良県下だと都祁山口神社、當麻山口神社、耳成山口神社、鴨山口神社などである。

火神被殺 (P24)

(STORY) 《伊弉諾神は、「ああ、わが妻の神よ、あの一人の子ゆえに、大事なおまえをなくするとは」とおっしゃって、それはそれはたいそうお嘆きになりました。そして、お涙のうちに、やっと、女神のおなきがらを、出雲の国と伯耆（ほうき）の国とのさかいにある比婆（ひば）の山にお葬りになりました。女神は、そこから、黄泉（よみ）の国という、死んだ人の行くまっくらな国へたっておしまいになりました。伊弉諾神は、そのあとで、さっそく十拳（とつか）の剣（つるぎ）という長い剣を引きぬいて、女神の災のもとになった火の神を、一うちに斬り殺してしまいになりました》(鈴)。

古事記（岩波文庫版）の24ページ目になって、初めて奈良県(橿原市の哭沢神社)が登場する。妻の伊邪那美命を亡くし、その遺体にながって泣いた伊邪那岐命の涙から、泣澤女神（ナキサワメノカミ）が生まれる。《泉の湧き水の精霊神とされる。神名の「ナキ」は「泣き」で、「サワ」は泣く様子の形容である。「メ」とあるので女神である。『古事記』では「香山（かぐやま）の畝尾（うねを）の木の下に坐す神」と記される。『延喜式神名帳』には畝尾都多本（うねをつたもと）神社（奈良県橿原市木之本町に現存。通称「哭沢（なきさわ）神社」）が記載されており、啼沢女命が祀られている》(W)。哭沢神社のご神体は、井戸である。

6. 黄泉の国 (P26)

(STORY) 《「黄泉の国の食事を口にしたいイザナミ」イザナミは火の神を生んで焼け死に、イザナキは妻を取り戻そうと、死者の世界である黄泉の国を訪ねる。イザナキが黄泉の国を訪れ、入り口で妻の名を呼ぶと、イザナミは生前と変わらぬ美しい姿で登場した。地上に帰ってくるよう頼む夫に、イザナミは「黄泉戸喫（よみつへぐい）をしてしまったので、もう帰れないのです」と答える。黄泉戸喫とは、黄泉の国の食べ物を口にすることである。古代日本では、他界で食事をすると、その世界の人間にならなければならないという風習があった。しかし、夫は「どうしても戻ってきてほしい」と頼み込む。その熱意に負け、イザナミは「黄泉の国の神に頼んでみますから、待っていてください。ただし、私か戻ってくるまでは、どんなことがあっても黄泉の国の中をのぞいてはいけません」と、中へ入っていった》(武)。

(STORY) 《「変わり果てた妻に驚き、逃げ出す夫」 長い時間待たされたイザナキは、黄泉

の国の中をのぞいてしまう。そこには、腐ってウジがわいた妻の体があった。驚愕したイザナキは逃げ出す。そのイザナキを、黄泉の国の黄泉醜女（よもつしこめ＝黄泉の国に住む醜い女たち）や雷神、軍勢、髪を振り乱したイザナミが追いかける。イザナキは髪飾り（冠）や櫛、桃の実などを投げつけ、どうにか逃げ切る。この神話は呪的逃走神話といわれる。最後にイザナキは、この世とあの世をつなぐ黄泉比良坂（よもつひらさか）に巨大な石を置き妻に別れを言い渡した。イザナミは「ならば私は1日に1000人殺してやる」と呪いの言葉を吐き、イザナキは「私は1日に1500の産屋を建てる」と返した。以来、人は死亡する数よりも多く生まれるようになったのである》（同）。

揖夜（いや）神社（島根県松江市東出雲町揖屋）南方の谷間に「神蹟黄泉平坂伊賦夜（いふや）坂傳説地」の石碑がある。なお死人が蘇生するという「蘇（よみがえ）る・甦る」の語源は「黄泉（よみ）帰る」、つまり黄泉の国から帰ってくる、ということである。

7. 禊祓（みそぎはらえ）と神々の化生(28)

（STORY）《イザナギは黄泉の国の穢れを落とすため、禊（みそぎ）を行い、左目を洗ったときに天照大御神（アマテラスオオミカミ）、右目を洗ったときに月読命（ツクヨミノミコト）、鼻を洗ったときに須佐之男命（スサノオノミコト）を産む。（中略）これら三神は三貴子と呼ばれ、神々の中で重要な位置をしめる》（W）。

8. 三貴子の分治 (P30)

（STORY）《伊弉諾神はこのお三方をご覧になって、「わしもこれまでいくたりも子供を生んだが、とうとうしまいに、一等よい子供を生んだ」と、それはそれは大喜びををなさいまして、さっそく玉の首飾りをおはずしになって、それをさらさらとゆり鳴らしながら、天照大神におあげになりました。そして、「おまえは天へのぼって高天原を治めよ」とおっしゃいました。それから月読命には、「おまえは夜の国を治めよ」とお言いつけになり、三ばんめの須佐之男命には、「おまえは大海（おおうみ）の上を治めよ」とお言いわたしになりました》（鈴）。

9. 須佐之男命の涕泣（ていきゅう）(P31)

（STORY）《天照大神と、二番目の弟さまの月読命とは、おとうさまのご命令に従って、それぞれ大空と夜の国とをお治めになりました。ところが末のお子さまの須佐之男命だけは、おとうさまのお言いつけをお聞きにならないで、いつまでたっても大海を治めようとなさらないばかりか、りっぱな長いおひげが胸の上までたれさがるほどの、大きなおとなにおなりになっても、やっぱり、赤んぼうのように、絶えまもなくわんわんわんわんお泣き狂いになって、どうにもこうにも手のつけようがありませんでした。そのひどいお泣き方といたら、それこそ、青い山々の草木も、やかましい泣き声で泣き枯らされてしまい、川や海の水も、その火のつくような泣き声のために、すっかり干あがったほどでした。すると、いろんな悪い神々たちが、そのさわぎにつけこんで、わいわいとうるさくさわぎまわりました。そのおかげで、地の上にはありとあらゆる災が一どきに起こってきました》（鈴）。

(STORY)《伊弉諾命は、それをご覧になると、びっくりなすって、さっそく須佐之男命をお呼びになって、「いったい、おまえは、わしの言うことも聞かないで、何をそんなに泣き狂ってばかりいるのか」ときびしくおとがめになりました。すると須佐之男命はむきになって、「私はおかあさまのおそばへ行きたいから泣くのです」とおっしゃいました。伊弉諾命はそれをお聞きになると、たいそうお腹立ちになって、「そんなかってな子は、この国へおくわけにゆかない。どこへなりと出て行け」とおっしゃいました》(同)。

古事記に《伊邪那岐命は、淡海（おうみ）の多賀（たが）に坐（いま）すなり》(岩)、つまり近江の多賀大社に鎮座されているとある。多賀大社（お多賀）は、滋賀県犬上郡多賀町多賀にある神社で、伊邪那岐命・伊邪那美命の2柱をお祀りしている。「**お伊勢参らばお多賀へ参れ、お伊勢お多賀の子でござる**」という俗謡がある。《「お多賀の子」とは、伊勢神宮（内宮）祭神である天照大神が伊邪那岐命・伊邪那美命両神の御子である神話体系を歌詞に映したものである》(W)。

天照大神と須佐之男命 (P32)

1. 須佐之男命（建速須佐之男命）の昇天(同)

(STORY)《伊邪那岐命は怒って「それならばこの国に住んではいけない」として彼を追放した。建速須佐之男命は、姉の天照大神に会ってから根の国へ行こうと思って、天照大神が治める高天原へと登っていく。すると山川が響動し国土が皆震動したので、天照大神は建速須佐之男命が高天原を奪いに來たのだと思い、弓矢を携えて彼を迎えた。建速須佐之男命は天照大神の疑いを解くために、二神で宇氣比・誓約（うけい）をしようといった。二神は天の安河を挟んで誓約を行った》(W)。誓約とは、占いのことである。

2. 天の安の河の誓約（うけい）(P33)

(STORY)《まず、天照大神が建速須佐之男命の持っている十拳剣（とつかのつるぎ）を受け取ってそれを噛み砕き、吹き出した息の霧から以下の三柱の女神（宗像三女神）が生まれた。この女神は宗像（むなかた）の民が信仰しており、宗像大社に祀られている。（中略）次に、建速須佐之男命が、天照大神が持っていた「八尺の勾玉の五百箇のみすまるの珠」受け取ってそれを噛み砕き、吹き出した息の霧から以下の五柱の男神が生まれた》(W)。



3. 須佐之男命の勝さび (P35)

(STORY) 《古事記では天照大神は、後に生まれた男神は自分の物から生まれたから自分の子として引き取って養い、先に生まれた女神は建速須佐之男命の物から生まれたから彼の子だと宣言した。建速須佐之男命は自分の心が潔白だから私の子は優しい女神だったといい、天照大神は彼を許した》(W)。

4. 天の石屋戸（いわやと）(P36)

(STORY) 《誓約によって身の潔白を証明した建速須佐之男命は、そのまま高天原に居座った。そして、田の畔を壊して溝を埋めたり、御殿に糞を撒き散らしたりの乱暴を働いた。他の神は天照大神に苦情をいうが、天照大神は、「考えがあつてのことなのだ」と建速須佐之男命をかばった。しかし、天照大神が機屋で神に奉げる衣を織っていたとき、建速須佐之男命が機屋の屋根に穴を開けて、そこから皮を剥いだ馬を落とし入れたため、一人の天の服織女が驚いて梭（ひ）で陰部を刺して死んでしまった。ここにきて、天照大神は建速須佐之男命の行動に怒り、天岩戸に引き籠ってしまった。高天原も葦原中国も闇となり、さまざま禍（まが）が発生した》(W)。

この「石屋戸」は一般に岩窟と解されているが、本居宣長は『古事記伝』に「必ずしも実の岩窟（イハヤ）には非じ」「ただ尋常の殿をかく云るなるべし」と書いている。つまり「石（岩）」は、「天の磐船（いわふね）」などと同じく神話的な呪称で、石屋戸は普通の建物であるとする。なお《天照大神が天岩戸に隠れて世の中が闇になるという話は、日食を表したものだという解釈と、冬至を過ぎて太陽が弱まった力を取り戻すということを象徴したものとする見方がある》(W)。

(STORY) 《そこで、八百万の神々が天の安河の川原に集まり、どうすればいいか相談をした。思金神（オモイカネノカミ）の案により、さまざまな儀式をおこなった。常世の長鳴鳥（鶏）を集めて鳴かせた。天の安河の川上にある堅い岩を取り、鉾山の鉄を採り、鍛冶師の天津麻羅（アマツマラ）を探し、伊斯許理度売命（イシコリドメノミコト）に命じて八咫鏡（やたのががみ）を作らせた。玉祖命（タマノヤノミコト）に命じて、八尺の勾玉の五百箇のみすまるの珠（八尺瓊勾玉＝やさかにのまがたま）を作らせた。天児屋命（アメノコヤネノミコト）と布刀玉命（太玉命＝フトダマノミコト）を呼び、雄鹿の肩の骨を抜き取り、ははかの木を取って占い（太占）をさせた。賢木（さかき）を根ごと掘り起こし、枝に八尺瓊勾玉と八咫鏡と布帛をかけ、布刀玉命が御幣として奉げ持った。天児屋命が祝詞（のりと）を唱え、天手力雄（アメノタヂカラオ）神が岩戸の脇に隠れて立った》(W)。

(STORY) 《天宇受賣命（アメノウズメノミコト）が岩戸の前に桶を伏せて踏み鳴らし、神憑りをして、胸をさらけ出し、裳の紐を陰部までおし下げて踊った。すると、高天原が鳴り轟くように八百万の神が一斉に笑った。この声を聴いた天照大神は何事だろうと天岩戸の扉を少し開け、「自分が岩戸に籠って闇になっているというのに、なぜ、天宇受賣命は楽しそうに舞い、八百万の神は笑っているのか」と問うた。天宇受賣命が「貴方様より貴い神が表れたので、それを喜んでいるのです」というと、天児屋命と布刀玉命が天照大神の

前に鏡を差し出した。鏡に写る自分の姿がその貴い神だと思った天照大神が、その姿をもっとよくみようと岩戸をさらに開けたとき、隠れていた天手力雄神（アメノタヂカラオ）がその手を取って岩戸の外へ引きずり出した。すぐに布刀玉命が注連縄を岩戸の入口に張り、「もうこれより中に入らないで下さい」といった。こうして天照大神が岩戸の外に出てくると、高天原も葦原中国も明るくなった。八百万の神は相談し、建速須佐之男命に罪を償うためのたくさんの品物を科し、髭と手足の爪を切って高天原から追放した》（同）。須佐之男は疫神として、牛頭天王（ごずてんのう）と習合し、祇園社などに祀られている。

天の石屋戸の前でどんちゃん騒ぎをする話は、どなたも聞き覚えのある話であろう。三浦佑之著『古事記講義』（文藝春秋）によると《ここに描かれているのは、すべてオモヒカネ（思金神）の脚本による芝居なのです。オモヒカネは、この場面では脚本家兼演出家兼舞台監督という役割を担当し、神がみを役者としてひと芝居打つというわけです》。

ところで、天宇受賣（アメノウズメ）のストリップショーは、どのように英訳されているのだろうか、『The KOJIKI』（TUTTLE PUBLISHING）を紐解いてみた。そこには

…laying a sounding-board before the door of the Heavenly Rock-Dwelling（天の石屋戸），and stamping till she made it resound and doing as if possessed by a Deity（神懸りしたように），and pulling out the nipples（乳首） of her breasts（乳房），pushing down her shirt-string（裳紐）usque（ずっと）ad（まで）privatas partes（婉曲的表現で「陰部」）．Then the Plain of High Heaven（高天原）shook, and the eight hundred myriad Deities（八百万の神）laughed together.

とあった。「usque（ずっと）ad（まで）」はラテン語だし、「privatas partes」とは、ずいぶん遠回しな表現である（原文は「胸乳〔むなち〕をかき出で裳緒〔もひも〕を陰〔ほと〕に押し垂れき」）。訳者は紳士なので、ストレートに表現することがよほど憚（はばか）られたのだろう。それにしても、日本の神さまは大らかだったのだ。なおアメノウズメは猿女（サルメ）の祖で、その末裔が稗田阿礼、という関係になる。

《高天原の神々は、アマテラスを怒らせたスサノヲの罪を清めることにした。まず、神々はスサノヲに捧げ物を差し出させ、同時に、スサノヲにひげや髪を切らせ、身体を洗わせた。これらはともに、神道で穢（けが）れを落とす儀式である。この後、神々はスサノヲを高天原から追放した。スサノヲ追放の物語を通じて、『古事記』『日本書紀』の編纂者は、しきりにアマテラスと後に出雲を治めるスサノヲとの上下関係を強調している。これは「皇族の優位性」「朝廷による出雲支配」を強調したためだろう》（武）。

なお西郷信綱氏は『古事記の世界』（岩波新書）のなかで、**天空の高天原につながる太陽の昇る東の伊勢に対して、出雲は日の沈む暗黒の世界として黄泉の国につながっており、それが古事記の世界観である、**としている（P 4の範疇表のとおり）。

5. 五穀の起源 (P38)

(STORY) 《須佐之男命は、大気都比売命（おおげつひめのみこと）という女神に、何か物を食べさせよとおおせになりました。大気都比売命は、おことばに従って、さっそく、鼻の穴や口の中からいろいろの食べものを出して、それをいろいろにお料理してさしあげました。すると須佐之男命は大気都比売命のすることを見ていらして、「こら、そんな、お前の口や鼻から出したものがおれに食えるか。無礼なやつだ」と、たいそうお腹立ちになって、いきなり剣を抜いて、大気都比売命をうちに切り殺しておしまいになりました。そうすると、その死がいの頭から、かいこが生まれ、両方の目にいねがなり、二つの耳にあわがなりました。それから鼻にはあずきがなり、おなかに、むぎとだいずがなりました。それを神産霊神（かみむすびのかみ）がお取り集めになって、日本じゅうの穀物の種になさいました。須佐之男命は、そのまま下界へおりておいでになりました》（鈴）。

6. 須佐之男命の大蛇退治 (P39)

(STORY) 《「地上に降りたスサノヲの活躍」 高天原を追われ、出雲にやってきたスサノヲは、泣いている老夫婦に会う。「娘を八俣大蛇（八岐大蛇＝ヤマタノヲロチ）という怪物のいけにえにしなくてはならない」と聞き、スサノヲはヲロチを退治することにした。スサノヲは、屋敷を垣根で囲ませて、門に酒を入れた桶を置かせた。そして、娘を食べようとやってきたヲロチに、スサノヲは酒をすすめ、酒を飲で酔いつぶれたヲロチを、剣で切り刻んだ。このとき、ヲロチの尻尾から剣が出てきた。皇室に伝わる三種の神器の1つ、草薙（くさなぎ）の大刀（天叢雲剣＝あめのむらくものつるぎ）である》（武）。

《この物語には、さまざまな解釈がある。1つは、ヲロチが山の神であるという説だ。古代人は野山を切り開き、田畑をつくった際、「自分たちは神領域を侵した。暴風雨などの災害はそれに対する神の怒り」と考え、神の怒りを鎮めるために、酒を供えた。その儀式力物語の原型だというわけだ。ヲロチは製鉄の神だったという解釈もある。鉄を扱う十分な技術がない人々は鉄（ヲロチ）を制御できなかったが、すぐれた技術者（スサノヲ）があらわれ、人は鉄から剣をつくり出せるようになったというものだ》（同）。

西郷信綱著『古事記の世界』（岩波新書）には《高天の原を追われたスサノヲのおりたったのは、出雲の肥の川上の鳥髪（とりかみ）という地である。ここで例の八岐大蛇退治の話になるわけだが、この話におけるスサノヲは、根の国の主としてのスサノヲとは、いちおう分けて考える必要がある。これは別々の伝承であったのが一神格に統合された姿である》とある。

大国主神 (P42)

1. 稲羽の素戔（白兔）（同）

(STORY) 《大国主神には多くの兄弟（八十神）がいた。八十神（やそがみ）は国を大国主に避けた。その所以は八十神が稲羽の八上比賣（やがみひめ）に求婚したいと思い、ともに稲羽（いなば）に出掛けた時のことにある。八十神は大穴牟遲神（おおむなぢのかみ＝大国主神）に袋を持たせ、従者のようにして連れて行った。気多（けた）の前まで来たとき、

裸の兎（あかはだのうさぎ）が伏せていた。八十神が兎に言った「お前のすべきこと、それは海塩を浴び、風にあたって、高山尾上（高い山の尾根の上、の意味か）に伏せていることだ」。兎がその通りにすると、海塩が乾くにつれて、身の皮が風に吹き裂かれた。》(W)。

(STORY) 《兎が痛みに苦しんで泣き伏せていると、最後にやってきた大穴牟遲神が「どうして泣いているのか」と聞いた。菟が申すことには、「私は淤岐嶋（おきのしま）にいて、この地に渡ろうと思ったが、渡る手段がありませんでした。そこで、海の和邇（ワニ）を欺いて、『私とあなたとを比べて、どちらが同族が多いか数えよう。できるだけ同族を集めてきて、この島から気多の前まで並んでおくれ。私がおの上を踏んで走りながら数えて渡ろう』と言いました。このように言ったところ、欺かれて和邇は列をなし、私はその上を踏んで数えながら渡ってきて、今にも地に下りようとしたときに、私は言ってしまったのです、『お前は欺かれたんだよ』と。言いおわるやいなや、最端にいた和邇は、私を捕えてすっかり衣服を剥いでしまった》(同)。

(STORY) 《これを泣き憂いていたところ、先に行った八十神が『海塩を浴びて、風に当たって伏していなさい』と教えて言ったのです。それで、教えのとおりにしたところ、この身はすっかり傷ついてしまったのです」。そこで、大穴牟遲神が兎に教えて言うことには、「今すぐ水門へ行き、水で体を洗い、その水門の蒲（がま）をとって敷き散らして、その上を転がまわれれば、膚はもとのように戻り、必ず癒えるだろう」。そこで、教えのとおりになると、その体は本来のようになった。これが、稲羽の素兎（しろうさぎ）である。今は兎神と呼ばれるようになった。兎が大穴牟遲神に畏み言うことには、「八十神は八上比賣を決して得られない。袋を背負っていても、あなた様が獲得なさる」と畏み申した》(同)。

西郷信綱著『古事記の世界』（岩波新書）には、素兎に治療の方法を教える大国主神は《**まさに巫医（medicine man＝呪術医）としての原始的な王の姿である**》と記されている。

Wikipediaには《この説話において、「水門の蒲」があたかも薬のように登場する。この記載を、日本における薬の史籍の最初だとする見方もある。この説話と八十神の迫害における貝を用いる治療の描写は、古代の医術の一端を今に伝えるものと理解する向きもある》。



七福神の1つ、大黒天は、大国主神と密教の大黒天（マハーカーラ）が習合した神さまだ

2. 八十神の迫害 (P44)

(STORY) 《「八十神に殺されるオオクニヌシ」 我こそはと競い合いながらヤカミヒメのもとにたどりついた八十神たちだが、ヤカミヒメは、「私はオオクニヌシノカミと結婚します」と宣言する。おおいに怒った八十神はオオクニヌシを伯伎国の手間山（鳥取と島根の境にある山）へ連れて行き、「赤い猪を追いつれとすから、お前が捕らえろ」と命じ、真っ赤に焼いた大岩を山から転がし落とした。オオクニヌシは大岩に飛びつき、じゅっと焼かれて死んでしまう。オオクニヌシの母神はたいそう悲しみ、天のカミムスヒノカミの協力を得て、オオクニヌシを蘇生させる。八十神は再びオオクニヌシを殺すが、またも母神がオオクニヌシを助ける。八十神のしつこさに、オオクニヌシは根の国に退いていたスサノヲノミコトを訪ねることにした》(武)。

3. 根の国訪問 (P45)

(STORY) 《「スサノヲからも試練を課せられる」 根の国でオオクニヌシを出迎えたのは、スサノヲの娘のスセリビメであった。2人はひとめで恋に落ち深い仲になる。スセリビメは「たいそう立派な神がおいでになった」とスサノヲにオオクニヌシを紹介する。スサノヲはオオクニヌシを鍛えるため、さまざまな試練を課す。蛇の室、ムカデと蜂の室、野火、ムカデ取り……。そのつど、オオクニヌシはスセリビメの力添えや自身の知恵で試練を乗り越えた。そして姫と根の国の呪具—生太刀（いくたち）と生弓矢（いくゆみや）、天の詔琴（あまののりごと）—を奪って根の国から逃げ出すのである。スサノヲは後を追うが、かけつけたときすでに2人は黄泉津比良坂を越えていた。スサノヲは娘をあきらめ、生太刀と生弓矢を用いて兄弟たちを従え、「大国主命」と名乗って出雲の国を治めるよう告げる。根の国の呪具とスセリビメを得て、オオクニヌシは地上の統治を開始する》(武)。

《根の国での説話は、結婚相手の父から試練を与えられて、結婚相手の助言や手助けによって克服するという課題婚と呼ばれる神話の形式である。オオナムジはこの試練をスセリビメの助けを得て乗り越え、正妻としたことにより、真に大国主になることができたと考えられる》(W)。

4. 沼河比売求婚 (P48) ～ 7. 少名毘古那神と国作り (P53)

(STORY) 《「スクナビコナの助け舟」 スサノヲノミコトに地上の統治を認められたオオクニヌシノカミは、生太刀と生弓矢によって八十神を従えた。いよいよ国作りが始まるわけだが、オオクニヌシには国を治める知恵がない。悩むオオクニヌシが出雲の美保の崎を歩いていたところ、ガガイモのさやを割った船に乗った小さな神があらわれた。その神こそが、少彦名命（少名毘古那神＝スクナビコナノカミ）である。オオクニヌシは、スクナビコナの助けを得て、人や家畜の病気の治療法や作物を災害から守る方法などを定め、国を治めていった。オオクニヌシが人間よりも大きな巨人神であるのに対して、スクナビコナは、わずか数cmほどの小ささであった。オオクニヌシは力を持つ大きな神であり、スクナビコナは知恵を持つ小さな神であり、両者が協力し、対等に活躍することで、国作りは順調に進んでいったのである》(武)。

少名毘古那神は、古事記に「鵜（ひむし＝蛾）の皮の服を着ている」とあることから、小柄な神とされ、一寸法師のルーツともいわれる。《「小さな子」のモチーフは、日本においては日本神話のスクナヒコナがその源流と考えられる。（中略） 大国主命がスクナヒコナの助力により国づくりをしたように小人は巨人とペアになって英雄の属性たる力と知恵をそれぞれ分け持つことが多い》(W)。

(STORY) 《「自分自身の魂が登場」 しかしあるとき、スクナビコナが淡路島の粟の茎に乗って遊んでいたところ、茎がしなって、常世国（海のかなたにある世界。不老不死の世界ともいわれる）に飛ばされてしまう。スクナビコナが去り、オオクニヌシは「私はどうやって国作りという大事業をなしとげたらよいのか」と嘆く。すると、「お前を助けよう」と、海を渡ってやってくる神があった。その神は「自分をまつれば、お前の国作りはなしとげられるだろう」という。名を尋ねると、「お前自身の幸魂（さきみたま）、奇魂（くしみたま）である」と答えた。幸魂とは「幸福をもたらす魂」であり、奇魂とは「万事を知る魂」を意味する。オオクニヌシはその神を三輪山にまつり（大物主神）、自らの内なる力をもって国作りを進め、国はおおいににぎわった》(武)。

神の靈魂は、荒魂（あらたま＝荒々しい側面）と和魂（にぎたま＝やさしく平和的な側面）の2つの側面を持つとされる。和魂は、また幸魂（さきみたま＝収穫・幸せを与える側面）と奇魂（くしみたま＝万事を知るとい側面）に分けられる（並立するともいわれる）。なお、こんぴらさん（金比羅宮・金比羅神社＝神仏習合の神社）の主祭神も、大物主神である。

8. 大年神（おとしのかみ）の神裔 (P54)

「年」は稲の実りのことで、穀物神。《スサノオと神大市比売（かむおおいちひめ・大山津見神の娘）の間に生まれた神を大年神としている。両神の間の子にはほかに宇迦之御魂神がおり、これも穀物神である。また、大年神と香用比売（カヨヒメ）の間の子に御年神（みとしのかみ、おとしのかみ）、孫に若年神（わかとしのかみ）がおり、同様の神格の神とされる》(W)。

また大年神とアメノチカルミヅヒメの間に生まれたのが大山咋神（おおやまくいのかみ）である。《名前の「くい（くひ）」は杭のことで、大山に杭を打つ神、すなわち大きな山の所有者の神を意味する。『古事記』では、近江国の日枝山（ひえのやま、後の比叡山）および葛野（かづの）の松尾に鎮座し、鳴鏑を神体とすると記されている》(同)。

葦原中国（あしはらのなかつくに）の平定 (P55)

《葦原中国平定は、天津神が国津神から葦原中国の国譲りを受ける日本神話の説話である。国譲り（くにゆずり）ともいう。天照大御神ら高天原にいた神々（天津神）は、「葦原中国を統治すべきなのは、天津神、とりわけ天照大御神の子孫だ」とした。そのため、何人かの神を出雲に使わした》(W)。

西郷信綱著『古事記の世界』（岩波新書）によると《「葦原中国」という語は、ふつう解釈されているごとく日本国の古称ではなく、高天の原からの神話的命名であり、しかも高天の原から見た場合、これは葦の葉の不気味にざわざわと「さやぐ」世界、つまり、荒ぶる神どもが棲息し、混沌と無秩序とに蔽われた未開の地であり、宗教的にいえば聖ならざる、俗なる、醜き世界であり、だからこそ、その棟梁大国主は葦原醜男（しこお）とよばれた》。

1. 天菩比神（アメノホヒノカミ）（同）

（STORY）《「葦原の中つ国の繁栄に目をつけた高天原の一方的な要求」 オホクニヌシが国造りを始めてからしばしの歳月が流れた。ある時、オホクニヌシの国が繁栄している様子を眺めたアマテラスは、葦原の中つ国は自分の御子が治めるべき地であると宣言し、我が子アメノオシホミミ（天忍穗耳命）へ国を譲らせようと考えた。しかし天浮橋から下界を見下ろして、神々が暴れているのを見たアメノオシホミミは引き返してきてしまう。そこでアマテラスは御子の降臨の準備をするため、アメノホヒを交渉の使者として下界に遣わした。ところが、この神はすぐオホクニヌシに懐柔されてしまった》（坂）

2. 天若日子（アメノワカヒコ）（P56）

（STORY）《次に任務に就いたのはアメノワカヒコである。しかし、弓矢を与えられて勇んで地上に降り立ったものの、オホクニヌシの娘、シタデルヒメ（下照比賣）に出会ったことで、その決意は翻されてしまう。天上に妻がありながらシタデルヒメを娶り、オホクニヌシの跡取りにでもなる様子である高天原の意図を知ってか知らずか、使者たちはオホクニヌシによって巧みに懐柔され、また殺され、国譲りの外交交渉はことごとく失敗に終わる。アマテラスは役目を思い出させるため、キジのナキメ（鳴女）を遣わした。ところがアメノワカヒコは、言葉に耳を傾けるどころか、この使者を配下の者の進言によって射殺してしまう。これはもう公然たる裏切りであった。ナキメを射抜いた矢は、高天原最高神の一人タカミムスヒ（高御産巢日神）のもとまで飛んだ。彼は血のついた矢が、アメノワカヒコのものを知ると、アメノワカヒコに邪心がなければ当たらず、高天原に背いてのことから射殺すようにと念じて矢を放つ。その矢は、寝床に横たわるアメノワカヒコの胸を刺し貫いたのだった》（坂）。

《「祭祀文化の中心であったため狙われた出雲」 国譲り神話に果たして歴史的根拠はあるのだろうか。昭和59（1984）年、島根県斐川町の荒神谷遺跡で、それまで全国で出土した銅剣の総数約300本をゆうに上回る、358本の銅剣と最古級の銅鐸6個、銅鉾16本が発見された。同時期の出雲は、現在の出雲平野の多くが海の中にあり農耕に適した土地の少ないという地理的条件だった。その一方で当時、銅剣や銅鐸は祭祀において重要な役割を担っていたから、これらが大量に出土したということは、出雲が祭祀の中心としての地位を確立していたことを示している。それならば、「記紀」に少なからず登場し、出雲こそが地上世界の中心地であるかのように描かれていることにも合点がいく》（同）。

3. 建御雷神（タケミカヅチノカミ）（P60）～5. 建御名方神（タケミナカタノカミ）の
服従（P62）

（STORY）《「タケミカヅチに力比べを挑むも諏訪に敗走したタケミナカタ」 国譲りが計画通りに進まず、アマテラスはついに武力に長（た）けた神の派遣を決意する。そこで白羽の矢が立ったのが、天安河の河上にある天岩屋にいるアメノヲハバリ（伊都之尾羽張神）か、その子供のタケミカヅチ（建御雷神）であった。そしてアメノヲハバリが息子を推薦したため、タケミカヅチがアメノトリフネ（天鳥船神）と共に葦原の中つ国へと降りていった。やがて二柱の神は、出雲の伊那佐（いなさ）の浜にたどり着く。そこでタケミカヅチは長剣を海の上につきたてると、その切っ先の上にあぐらをかきながらオホクニヌシと談判を行なった。国譲りを迫られたオホクニヌシは答えを子のヤヘコトシロヌシ（八重事代主神）に託す。この息子は承諾したものの、1人、一方的な高天原の論理に異を唱えた者があった。オホクニヌシの御子の一人タケミナカタ（建御名方神）である》（坂）。



七福神の1つ、恵比寿は、大国主神の子の
事代主神（八重事代主神）であるとされる

（STORY）《彼は勇敢にもタケミカヅチに力比べを挑む。先手を取ったタケミナカタはタケミカヅチの手をつかんだ。しかしその手は氷の柱になり、さらに剣の刃へと姿を変えた。一方、タケミカヅチは、ひるむタケミナカタの手首をつかんで握りつぶし、千切れた手先を投げてしまう。歴然とする力の差に恐れをなしたタケミナカタは逃亡。しかし、タケミカヅチはこれを猛然と追ってきた。とうとう信濃の諏訪湖の近くに追い詰められ、殺されそうになる。ここでようやくタケミナカタは降参し、信濃の地からは一歩も出ないことを約束して必死の命乞いをするのだった》（同）。

《タケミナカタを降したタケミカヅチは、常陸（現在の茨城県）の地方豪族によって権威のある神として祀られていた。おそらく天皇家の権威をこれらの地方豪族に示すために、神話に組み込まれたのだろう》（同）。

6. 大国主神の国譲り（P63）

(STORY)《建御雷神は出雲に戻り、大国主神に再度訊ねた。大国主神は「二人の息子が天つ神に従うというのであれば、私も逆らわずにこの国を天つ神に差し上げる。その代わり、私の住む所として、天の御子が住むのと同じくらい大きな宮殿を建ててほしい。私の百八十神たちは、事代主神に従って天つ神に背かないだろう」と言った。出雲国の多藝志（たぎし）の小濱に宮殿を建てて、たくさんの料理を奉った。建御雷神は葦原中国平定をなし終え、高天原に復命した》(W)。

世界大百科事典の「国譲り神話」によると《**国譲り神話は各地の首長たちが朝廷へと服属していった歴史的過程を一回的に典型化して、その由来を語ったものなのである**》。

西郷信綱著『古事記の世界』（岩波新書）には、大国主神が《**多くの名を持ち、また書紀一書に181人もの子をもつとあるのも、かかる統合過程を示す。俗に神無月には全国の神々が出雲に集まるというのも、この統合過程の俗信化したものかも知れない**。神無月（10月）は、大嘗祭のための物忌みの月であった。だから大国玉という名は、大国を領するものの意であるよりは、日本書紀伝にいうごとく、多くの国主を統べあわせた神という意であったと思う。大国主が国作りするとともに国譲りする神であるわけが、かくして理解できるはずである》。

邇邇芸命（ニニギノミコト）(P64)

1. 天孫の誕生(同)～4. 猿女（さるめ）の君(P67)

(STORY)《「神々を率いて高千穂に降臨したニニギ」 タケミナカタの降伏によって、天孫降臨の準備は整った。当初アマテラスは、アメノオシホミミ（天忍穂耳）を降臨させる予定であったが、アメノオシホミミにニニギ（邇邇芸）という子が生まれたため、このニニギを降臨させることとなった。ところがいざ出発という時、行く手に天地を照らしながら恐ろしい形相をした男神が立ちはだかった。そこでまずアメノウズメ（天宇受賣）がその正体を確かめるために遣わされた。男神の名はサルタビコ（猿田毘古）。道筋を治め境界を護る道祖神の性質を持つこの神は、天孫降臨の際の道案内を申し出たのだった》(坂)。

(STORY)《一行は天浮橋から地上へ降り立つと日向国（現在の宮崎県）、高千穂峰に至る。この地は、諸説あるが九州に存在することは確かだ。九州は温暖な気候で、海・山の幸が豊富な地。まさに天皇家の祖が降り立つにふさわしい場所なのである。ニニギは朝鮮半島に向き合った笠沙の岬にもつながる高千穂の地を絶好の地として宮を建て、ここに住み着いたのだった》(同)。

邇邇芸命は天孫（または皇孫）と呼ばれ、皇室の先祖とされる神である。世界大百科事典「天孫降臨」によると《平定された葦原中国には、あらためて日神の孫瓊瓊杵（邇邇芸＝ニニギ）尊が降されることになる。皇孫はアマテラスの神言によって支配者的資格を授かったうえ、（中略）諸神を伴として日向(ひむか)の高千穂の「くじふる嶽」に天降る。そして日向の国に宮居を定めた。この「神聖な」由来をもって、以後代々の「日の御子」による葦原中国の統治は、絶対おかすべからざるものとなったとされる》。

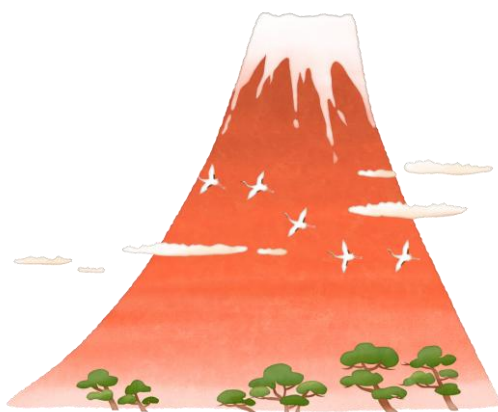
西郷信綱著『古事記の世界』（岩波新書）によると《降臨の地がなぜ筑紫のヒムカ（日向）であったかという問題にしても、イザナキが黄泉の国のけがれをはらうためミソギしたのが筑紫のヒムカであったのと同様で、そこにはやはり**ヒムカシ（東）という宇宙軸が生きているといわなければならない。だからそれは神話上のヒムカであって、必ずしも現実の日向の国ではなかった**》。

《降臨につき従ったのは、中臣の祖アメノコヤネ、忌部の祖フトダマ、猿女の祖アメノウズメ、鏡作の祖イシコリドメ、玉作の祖タマノオヤ等、あわせて五伴緒（イツトモノヲ）である。これらが**天の岩屋戸の前での祭にあずかった顔ぶれと同じなのは、天孫降臨と天の岩屋戸とが実は同根の話であるからである。**（中略）**大嘗祭が、冬至の太陽の復活を主にする話と、王の誕生すなわち即位を主にする話とにわけて説話化されたのだ。**それにしても、他の四氏の祖にくらべてこの2つの話でのアメノウズメの活動は、とくにいちじるしいといわねばならない》（古事記の世界）。

天孫降臨を導いた猿田毘古神（サルタビコノカミ）を、天宇受賣（アメノウズメ）は伊勢まで送り、「猿女の君」の名を賜る。『古事記』を語った稗田阿礼は猿女の子孫とされる。

5. 木花の佐久夜毘賣（コノハナノサクヤビメ）（P68）

（STORY）《「美しいコノハナサクヤビメとの幸せな時間」 ある時、ニニギは笠沙の岬で美しい女性コノハナサクヤビメに出会い、求婚する。これに対し、山神で父親のオホヤマツミ（大山津見）は、献上品とともに姉のイハナガヒメ（石長比賣）も嫁がせようとした。しかし、ニニギは容姿の劣る姉との結婚は断り、コノハナサクヤビメだけを娶る。オホヤマツミは恥じ入りながらも告げた。「イハナガヒメがいれば、天つ神の子孫の寿命は石のように堅固で安泰でした。苦難の時にも石のように耐え忍び、堅実に生き続けられるよう祈りを込めたからです。そしてコノハナサクヤビメには花のように栄えるよう、祈りを捧げて姉妹と一緒に嫁がせました。妹だけでは繁栄を遂げても、寿命ははかないものになってしまうでしょう」こうして天つ神の子孫たちは寿命を持ち、神々ほど長生きはできなくなったのである》（坂）。



(STORY) 《ほどなくコノハナサクヤビメは一夜の契りで妊娠したため、ニニギは自分の子ではないのではと疑う。この言動を『日本書紀』では、我が子とわかっていたが人々に天つ神の偉大な力を誇示し、妻子の靈力を示すためにわざと疑ったのだと説明している。そこでコノハナサクヤビメは、神の審判で身の証を立てようと産屋に火を放った。そして燃え盛る炎の中、ホデリ（火照命）、ホスセリ（火須勢理命）、ホヲリ（火遠理命）を産み、潔白を証明したのだった。この逸話は、ニニギから初代神武天皇に至る血統の神秘性を強調していると考えられる》(同)。ホオリの孫が、神武天皇となる。

今も木花の佐久夜毘賣は《富士山を神体山としている富士山本宮浅間大社（静岡県富士宮市）と、配下の日本国内約1300社の浅間神社に祀られている。火中出産の説話から火の神とされ、各地の山を統括する神である父のオオヤマツミから、火山である日本一の秀峰「富士山」を譲られた。祀られるようになり富士山に鎮座して東日本一帯を守護することになった》(W)。

火遠理命（ホヲリノミコト＝山幸彦）(P71)

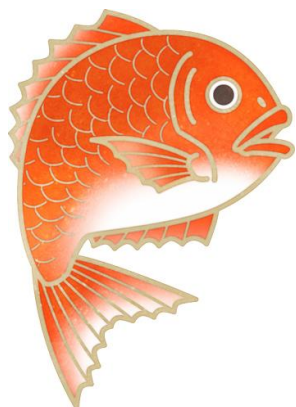
1. 海幸彦と山幸彦(P70)、2. 海神の宮訪問(P71)

(STORY) 《「海神を味方につけて兄を降参させた弟」 ニニギの御子であるホデリ（ウミサチビコ）は海の幸を、ホヲリ（ヤマサチビコ）は山の幸を享受できる力を持っていた。あるときホヲリは、それぞれの幸を得る道具を交換しようと提案するものの、結局海の幸を得られなかったばかりか、兄の大切な道具である釣り針をなくしてしまう。兄の許しを得られず困り果てたホヲリは、海辺でシホツチ（鹽椎）に出会い、この潮流の神の言うままに海の神・ワタツミ（綿津見）の宮へと向かう。そしてワタツミの娘トヨタマビメ（豊玉毘賣）と結ばれたホヲリは、海の世界で楽しく過ごしていたが、3年が過ぎたある日、本来の目的を思い出す》(坂)。

3. 火照命（ホデリノミコト＝海幸彦）の服従(P74)

(STORY) 《ホヲリは、トヨタマビメの協力で釣り針を取り戻したばかりか、兄より優位に立つため釣り針に呪文をかける術までも教わる。さらに海の潮を満たす塩盈珠（しおみつ

たま）と、潮を引かせる塩乾珠（しおふるたま）も手に入れ、ようやく地上へと戻った。釣り針は取り戻したものの呪文のせいで、貧しく心もすさんだホデリは弟を攻撃してきた。しかし、海神から強力な力を伝授されていたホヲリは、これを迎え撃つ。容赦なく塩盈珠でホデリを溺れさせ許しを請うと塩乾珠でこれを助けた。これを繰り返すことでついに兄を屈服させ、弟の守護人として仕えることを誓わせるのだった》(坂)。



《その兄ホデリの子孫たちが九州南部に勢力を張っていた隼人であると伝えられている。彼らは一種の呪術集団で、悪霊から朝廷を守護する役目を担いながら仕えていた。朝廷にとっては不可欠な存在であったから、服従してもらわねばならなかったのである。そこで隼人一族と天皇家の祖先は兄弟であったと持ち上げつつ、服従を促したというわけだ》(同)。

4. 鵜葺草葺不合命（ウガヤフキアエズノミコト）

(STORY) 《「海神と山神の能力を身につけた天皇家の祖」 ホヲリが兄を屈服させた頃、既にトヨタマビメは身籠っていた。そしていよいよ出産の時が近づくと、海の世界から夫の元にやってきた。ところがホヲリは、本来の大きなワニの姿に戻って出産する妻を見てしまう。姿を見られたことを恥じた妻は、子を残して故郷に帰ってしまった。一方、生まれた子供は、アマツヒコヒコナギサタケウガヤフキアヘズ（天津日高日子波限建鵜葺草葺不合命）と名付けられた。トヨタマビメはかわりに御子育する縁者として妹・タマヨリビメ（玉依毘賣）を遣わした。やがて御子はその女神と結婚する。そして、イツセ（五瀬）、イナヒ（稲氷）、ミケヌ（御毛沼）、イハレビコ（伊波禮毘古）という子宝に恵まれることとなる》(坂)。

《この物語において、コノハナサクヤビメによって山の神の血を受けた天皇の祖先は、海や水を司る神と結合し、陸と海の力を手に入れる。こうしてその子孫たちには豊穡が約束され、ひいては支配者としての正当性をも確立したのである。以上が、神代の物語である。この次の時代には、のちに神武天皇となるカムヤマトイハレビコ（神倭伊波禮毘古）が主人公となり、物語は神々の時代から人の時代へと移っていく》(同)。

海の神・綿津見（ワタツミ）の娘・豊玉姫の生んだ子が鵜葺草葺不合命で、天照大神の5代目の子孫になる。その子（神倭伊波禮毘古＝カムヤマトイワレビコ）が、のちの神武天皇なので、神武は海の神を曾祖父に持つのだ。ここでその直系を整理すると、

天照大神→天忍穗耳命（アメノオシホミミノミコト）→邇邇芸命（ニニギノミコト＝天孫・皇孫）→火遠理命（ホオリノミコト＝山幸彦）→鵜葺草葺不合命（ウガヤフキアエズノミコト）→神武天皇（神倭伊波禮毘古命）

となる。

(PART I. 終わり)



第Ⅱ章 人代篇（古事記 中つ巻・下つ巻）

武光誠著『図解雑学 古事記と日本書紀』（ナツメ社刊）の「『古事記』の構成」を再び引用すると《古事記は上・中・下の3巻で構成されている。上巻は「序」と神代の記事、中巻・下巻では皇室の系譜と継承がまとめられている。（中略）「中・下巻は天皇家の系譜と伝承を記述」中巻では初代神武天皇から15代応神天皇までの記事、下巻では16代仁徳天皇から33代推古天皇までの記事が載っている。中巻と下巻の区分けについては、「仁徳天皇が半人半神の時代と人間の時代との境目にあたる」という当時の考え方にもとづくものだとする説がある》。

《確かに応神天皇以前のエピソードは神がかり的な内容が多いが、仁徳天皇以降のものになると、骨肉の争いや恋の悩みなど、人間らしい実録風の記事が増えている。あるいは、中巻・下巻の区分けは、儒教の渡来をターニングポイントにしたのではないかという説もある。これは、儒教が渡来した時代を治めた応神天皇の代を中巻でしめくくり、儒教的聖帝である仁徳天皇を徳治の時代の始まりとして、下巻の冒頭に記述したのではないかというものである》（図解雑学 古事記と日本書紀）。

神武天皇 (P79)

古事記の中つ巻は、奈良県民にとっては親しみやすい「神武東征説話」に始まる。大事な部分なので、坂本勝監修『図説 地図とあらすじでわかる！ 古事記と日本書紀』（青春新書）から、やや詳しくあらすじを引用する。

（STORY）《ウガヤフキアヘズ（鵜葺草葺不合）とタマヨリビメ（玉依毘賣）の間に生まれた四人の子供のうち、長兄イツセ（五瀬＝彦五瀬）と末弟、イハレビコ（神伊波禮毘古）は、天下平定を思い立ち、東征の旅に出た。白肩（しらかた）の津に上陸したイツセとイハレビコを待ち受けていたのは、登美の豪族ナガスネビコ（那賀須泥毘古＝トミビコ）といい、天皇家の祖先が奈良盆地に侵攻した際の抵抗勢力の首長、または、縄文時代から祀られた手長足長の神であるといわれている。そのナガスネビコの抵抗は相当激しく、イハレビコの側にも大きな損害をもたらした。イツセが敵の矢を受けて負傷、木（きの）国まで来たところで無念の言葉を残して息を引き取ってしまうのだ》（坂）。

「登美的那賀須泥毘古」（＝長髓彦）は、《この人名から、奈良県生駒郡富雄村（奈良市三碓〔みつがらす〕町）の土豪であり、先住民であったと思われる。先住民を手長・足長と表現した例が多いからである》（新潮日本古典集成『古事記』）。

五瀬命が命を落とした竈山（かまやま）に、竈山神社がある。《和歌山市内に鎮座する神社である。式内社で、旧社格は官幣大社。釜山神社と表記されることもあった。神武天皇の長兄である彦五瀬命を祀る。本殿の裏に彦五瀬命のものとされる墓がある。（中略）江戸時代を通して寺社奉行の支配下に置かれ、氏子も社領もなく衰微していた。明治に入り、宮内省管轄の彦五瀬命墓と、竈山神社は正式に区分され、近代社格制度のもとで明治14年（1881年）に村社に列格したが、神武天皇の兄を祀るという由緒をもって社殿が整備され、明治18年（1885年）には官幣中社に、大正4年（1915年）にはついに官幣大社に進むという

異例の昇格をした。村社から官幣大社まで昇格したのは当神社が唯一の例である。現在は神社本庁の別表神社となっている》(W)。

(STORY) 《「神の力を借りて大和の地へ」 その後、弟イハレビコが中心となり、進軍が再開される。その一行は、日の神の御子として、太陽に面かって進撃するのはよくないということから、日を背にして戦おうという、イツセの死の直前になされた取り決めのため、海路南下し、熊野より再上陸を果たした。だがその熊野で妖気に当たり、一行は気を失って倒れてしまう。一同が目覚めたのは、タカクラジ（高倉下）という男が刀を持って現われた時であった。その男は、不思議な夢の話をした。それによると、自分の夢にアマテラスとタカミムスビが現われ、タケミカツチに子孫の手助けをするよう命じた。タケミカツチは自分が降らずとも、国を平定した時の大刀があればイハレビコを助けることができると言って、タカクラジの倉の屋根に穴を空けてその大刀を降し入れようと言った。翌朝、目覚めると夢の通りにこの大刀があったので、こうして献上したのだという。タカクラジは神々の意向通りに刀を届けにきたのだった》(坂)。

(STORY) 《その後、タカミムスビは、八咫鳥（やたがらす）を遣わしてイハレビコを先導させた。鳥の誘うほうに進みながら、イハレビコは、阿陀（あだ）の鵜飼の祖先をはじめ様々な人に出会う。この時、イハレビコは名前を問い、人々はこれに素直に答えているのだが、これは恭順の証で、イハレビコの支配を受け入れたことを意味している。一方で抵抗する者もいた。宇陀のエウカシは服従すると見せかけ、罠を施した屋敷にイハレビコを誘って殺そうと謀った。しかし、弟のオトウカシが兄の企みをイハレビコに知らせたため露見し、エウカシは、追い込まれて自分の仕掛けた罠にかかって死んだ。忍坂（おさか＝桜井市）では尾の生えた土雲（つちぐも）、ヤソタケルが岩屋の中で待ち構えていた。イハレビコはヤソタケルへの友好を装って、多くの配膳人にたくさんの料理を運ばせた。しかし配膳人たちは密かに刀を携えていたのである。そして、イハレビコの歌を合図に斬りかかり、油断したヤソタケルを打ち滅ぼしたのである。こうして次々と荒ぶる神々を征伐・服従させ、敵を退けたイハレビコは、畝火（うねび）の白檮原（かしはら）宮（檜原市の畝傍山麓に造営された宮殿）から天下を治めた。初代天神武の誕生である》(同)。

神武天皇は《日本神話に登場する人物で、日本の初代天皇である（古事記、日本書紀による）（中略）**神武天皇という呼称は、奈良時代後期の文人である淡海三船が歴代天皇の漢風諡号を一括撰進したときに付された**とされる。天皇が即位した年月日は、西暦紀元前660年2月11日と比定される。これにより、2月11日は日本が建国された日として、明治6年（1873年）に祭日（紀元節）と定められた。紀元節は昭和23年（1948年）に廃止されたものの、昭和42年（1967年）には建国記念の日として、祝日とされた》(W)。紀元前660年だから、今から約2700年近く前の話ということになる。

神武東征ゆかりの地には「**神武天皇聖蹟（せいせき）顕彰碑**」が建てられている。これは紀元二千六百年奉祝事業として選定されたものである（『神武天皇聖蹟調査報告』昭和17

年3月 文部省)。計19カ所の聖蹟が選定され、花崗岩製の同一規格・設計により、総工費25万円で建設・施工されたそうで、19カ所のうち、奈良県下には最多の7カ所がある。その7カ所を同報告書から抜粋すると

1. 菟田穿邑（うだのうかちのむら） 宇陀市菟田野区宇賀志
2. 菟田高倉山（うだのたかくらやま） 宇陀市大宇陀区守道高倉山頂
3. 丹生川上（にふのかわかみ） 東吉野村（丹生川上神社中社摂社 丹生神社北側）
4. 磐余邑（いわれのむら） 桜井市吉備（春日神社の北側）
5. 鷄邑（とびのむら） 生駒市上町 出垣内バス停東南の丘
6. 狭井河之上（さいがわのほとり） 桜井市茅原（狭井神社の北）
7. 鳥見山中霊時（とみやまなかのまつりのにわ） 桜井市（等弥神社の南側）

神武天皇の皇后は三嶋（大阪府三島郡）の溝咋（ミゾクヒ）の娘・比賣多多良伊須氣余理比賣（ヒメタタライスケヨリヒメ）、別名富登多多良伊須須岐比賣（ホトタタライスキヒメ）、日本書紀では媛蹈鞬五十鈴媛命。《神武天皇は、東征以前の日向ですでに吾平津姫を娶り子供も二人いたが、大和征服後、在地の豪族の娘を正妃とすることで、在地豪族を懐柔しようとした。天照大神の子孫である神武天皇とヒメタタライスケヨリヒメ（比賣多多良伊須氣余理比賣）が結婚することで、天津神系と国津神系に分かれた系譜がまた1つに統合されることになる。（中略）皇后の名の中にある「タタラ」とは、たたらか製鉄の時に用いられる道具であり、このことは、皇后の出身氏族が、製鉄と深い関係がある出雲（現 島根県安来地方）地域であったことを物語っている》(W)。

比賣多多良伊須氣余理比賣は、《『古事記』では、三輪大物主神（スサノオの子孫大国主の和魂とされる）と勢夜陀多良比売（セヤダタラヒメ）の娘である。勢夜陀多良比売が美人であるという噂を耳にした大物主は、彼女に一目惚れした。大物主は赤い矢に姿を変え、勢夜陀多良比売が用を足しに来る頃を見計らって川の上流から流れて行き、彼女の下を流れていくときに、ほと（陰所）を突いた。彼女がその矢を自分の部屋に持ち帰ると大物主は元の姿に戻り、二人は結ばれた。こうして生れた子がヒメタタライスケヨリヒメである。ホトを突かれてびっくりして生まれた子であるということでホトタタライスキヒメ（富登多多良伊須須岐比賣）と名づけ、後に「ホト」を嫌ってヒメタタライスケヨリヒメに名を変えた》(W)。

綏靖天皇 (P91)～開化天皇 (P96)

この間の8代にわたる天皇には、さしたるエピソードが残っていない。《2代綏靖天皇から9代開化天皇の約400年間はこれといったできごとが記述されておらず「**欠史八代（けっしはちだい）**」と呼ばれる。このため「神武天皇から9代開化天皇までは想像上の人物で、崇神天皇こそ大和朝廷を開いた人物なのではないか」と考えられてきた。しかし、纏向（まきむく）遺跡の発掘により、大和朝廷は崇神天皇以前から存在したことが確認された。欠史八代の天皇の中には、ヌナカワミミ、シキツヒコといった4世紀風の実名を持つ天皇もいる。つまり4世紀の大王（おおきみ）や王族の幾人かの名前だけは後世まで伝わり、そ

れらが欠史八代の中に散りばめられているのだろう》(武)。第7代孝霊天皇の子・吉備津彦は桃太郎のモデルとされ、黒田廬戸宮（くろだのいおとのみや＝孝霊天皇の宮跡伝承地）がある田原本町（奈良県磯城郡）は「桃太郎の生誕地」として町おこしに取り組んでいる。



崇神天皇 (P99)

『古事記』では《御眞木入日子印恵命（みまきいりひこいにえのみこと）である。**現代日本の学術上、実在可能性が見込める初めての天皇であると言われている。**（中略）記紀に伝えられる事績の史実性、欠史八代に繋がる系譜記事等には疑問もあるが、3世紀から4世紀初めにかけて実在した大王と捉える見方が少なくない。（中略）諡号（しごう 初国知らしし御眞木天皇＝ハツツクニシラシシミマキノスメラミコト）から、崇神天皇を初代天皇とする説や 崇神天皇と神武天皇を同一人物と見る説がある》(W)。

《欠史八代を史実の反映と見る立場からは、書紀の記述によると、神武天皇が畿内で即位後は畿内周辺の狭い領域のことしか出てこないが、崇神天皇の代になって初めて、日本の広範囲の出来事の記述が出てくるので、神武天皇から開化天皇までは畿内の地方政権の域を出ず、崇神天皇の代になって初めて日本全国規模の政権になったのではと考える説もある。また、**欠史八代の葛城王朝から崇神天皇に始まる三輪王朝への王朝交替説**もある。いずれの説も崇神天皇を実在の人物としている点では共通している》(同)。

(STORY) 《「崇りによる疫病を経て生まれた三輪山信仰」 第10代のミマキイリヒコイニエ（御眞木入日子印恵）こと、崇神天皇は、後に「初国知（はつくにし）らししミマキノスメラミコト」と称えられる通り、祭祀と政治のしくみを整えた最初の天皇である。この天皇の時代、国中に疫病が蔓延し、多くの民が命を失った。これを嘆いた天皇は神の言葉を聞くために神牀（かんどこ＝神のお告げを聞く場）につく。すると夢枕にはオホモノヌシ（大物主）が現れ、疫病の流行は自分が起こしたものだと告げる。そして、オホタタネコ（意富多多泥古＝大田田根子）に自分を祀らせれば崇りは治まり、国も平静を取り戻すとしたため、天皇はさっそくオホタタネコという人物を探すよう命じた。その人物は河内国の美努（みぬの）村で見つかり、天皇の元に送られた。早速オホタタネコは、オホモノヌシを三輪山に祀り、国は疫病の害から逃れることができたという》(坂)。

(STORY) 《『古事記』の崇神天皇条には、この後に、オホタタネコの祖であるオホモノヌシ

とイクタマヨリヒメ（活玉依毘賣）のエピソードが続いている。これによると、容姿端麗なイクタマヨリヒメは夜になると訪れる美しい男性の子を身籠った。これを知った両親は娘に、赤土を床の前に撒き、糸巻きに巻いた麻糸を針に通して男の着物の袖に通すようにいいつけ、その正体を確かめようとする。翌朝に調べてみると、麻糸は鍵穴を通り抜けていた。糸をたどっていったところ、三輪山の社に至る。こうして訪ねてきていたのは三輪山の神オホモノヌシであり、神の子を身籠ったことを知ったということである。ちなみにこの糸は三巻きしか残っていなかったことから、その地を三輪といったらしい》(同)。

垂仁天皇 (P105)

《『古事記』には「伊久米伊理毘古伊佐知命（いくめいりびこいさちのみこと）（中略）『日本書紀』、『古事記』に見える事績は総じて起源譚の性格が強いと、その史実性を疑問視する説もある》(W)。

(STORY) 《「沙本毘古（狭穂彦）の叛乱」 狭穂毘売（サホヒメ＝沙本毘賣）は垂仁天皇の皇后となっていた。ところがある日、兄の狭穂毘古（サホヒコ＝沙本毘古）に「お前は夫と私どちらが愛おしいか」と尋ねられて「兄のほうが愛おしい」と答えたところ、短刀を渡され天皇を暗殺するように言われる。妻を心から愛している天皇は何の疑問も抱かず姫の膝枕で眠りにつき、姫は三度短刀を振りかざすが夫不憫さに耐えられず涙をこぼしてしまう。目が覚めた天皇から、夢の中で「錦色の小蛇が私の首に巻きつき、佐保の方角から雨雲が起こり私の頬に雨がかかった。」これはどういう意味だろうと言われ、狭穂毘売は暗殺未遂の顛末を述べた後兄の元へ逃れてしまった》(同)。

(STORY) 《反逆者は討伐せねばならないが、天皇は姫を深く愛しており、姫の腹には天皇の子がすくすくと育っていた。姫も息子を道連れにするのが忍びなく天皇に息子を引き取るように頼んだ。天皇は敏捷な兵士を差し向けて息子を渡しに来た姫を奪還させようとするが、姫の決意は固かった。髪は剃りあげて鬘にし腕輪の糸は切り目を入れてあり衣装も酒で腐らせて兵士が触れるそばから破けてしまったため姫の奪還は叶わない。天皇が「この子の名はどうしたらよいか」と尋ねると、姫は「火の中で産んだのですから、名は本牟智和氣御子（ホムチワケノミコ）とつけたらよいでしょう」と申し上げた。また天皇が「お前が結んだ下紐は、誰が解いてくれるのか」と尋ねると、姫は「旦波比古多多須美知能宇斯王（タニハノヒコタタスミチノウシノオオキミ）に兄比売（エヒメ）と弟比売（オトヒメ）という姉妹がいます。彼女らは忠誠な民です。故に二人をお召しになるのがよいでしょう」と申し上げた。そうして炎に包まれた稻城の中で、狭穂毘売は兄に殉じてしまった》(同)。

(STORY) 多遲摩毛理（タヂマモリ＝田道間守）は《新羅から渡ってきたアメノヒボコの曾孫である。11代垂仁天皇の命により、非時香菓（ときじくのかぐのこのみ）を求めて常世の国（祖先の国である新羅のことと）に渡った。10年かかって葉付きの枝と果実付きの枝を日本に持ち帰ってきたが、垂仁天皇はすでに亡くなっていた。タヂマモリは半分を垂仁天皇の皇后に献上し、残りを垂仁天皇の御陵に捧げ、悲しみのあまり泣き叫びながら亡く

なったという》(同)。

《タヂマモリが持ち帰った「非時の香菓」は、記紀では現在の橘のこととしている。「タチバナ」という名前自体、タヂマバナ(田道間花)が転じたものとする説もある。当時「菓」といえば果物のことであったが、この説話からタヂマモリは菓子の神「菓祖」として信仰されている。果物や薬草を求めて異界に行く話は世界各地に伝わるもので、この説話は中国の神仙譚の影響を受けていると考えられる。例えば秦の徐福が蓬莱に不老不死の薬を求めに行く話がある》(同)。

景行天皇(P115)

景行天皇の皇子が小碓命(オウスノミコト)、のちの倭建命(ヤマトタケルノミコト)である。

※ヤマトタケルと熊襲征伐

(STORY)《「兄殺しから始まるヤマトタケルの伝説」 ある日、天皇はオウス(小碓命=のちの倭建命、日本武尊)に、「なぜお前の兄の大碓命(オホウスノミコト)は私たちといっしょに食事をとろうとしないのか。よく教えさとしてこい」と命じた。実は、オホウスは、父が妻にしようとしていた兄比売(エヒメ)、弟比売(オトヒメ)という美しい姉妹をわがものとしていたため、気まづかったのである。何日たってもオホウスは姿をあらわさない。不審に思った天皇がオウスに説明を求めると、オウスは平然と「あのけしからん兄ならば、厠に入るところをひとつとらえ、つかみつぶして手足を引きちぎり、薦に包んで捨てました」と答えた。景行天皇はその猛々しさに恐れをなし、わが身から遠ざけるため、オウスに熊襲(クマソ)征伐を命じたのである》(武)。

(STORY)《オウスは父の命を受け勇んで九州へ向かった。しかし熊襲は、武勇のほまれたかい民である。正攻法ではなかなか征伐できそうにない。そこでオウスは一計を案じた。熊襲の首長、川上梟帥(カワカミタケル『古事記』ではクマソタケル=熊曾建)が宴会を催した際、自ら女装して会場に紛れ込んだのである。見目うるわしいオウスをクマソタケルがみそめ、酌をするよう申しつけた。そして酒に酔い、すっかり油断したクマソタケルを、オウスは剣で一突きにしたのである。クマソタケルはオウスの武勇をたたえ、「これからヤマトタケルと名乗るがよい」といい残し、息を引き取った》(同)。

※ヤマトタケルの東征

(STORY)《「矢継ぎ早の出陣命令に肩を落とすヤマトタケル」 熊襲を討ち「日本武尊」(倭建命)と改名したオウスノミコトは、帰り際に出雲で、イズモタケル(出雲建)も倒すが、この話は『古事記』にのみみられる。西征から大和に帰ったヤマトタケルに、安住の日はやってこなかった。乱を起こす東国の平定を命じられたのである。矢継ぎ早の命令を辛く思い、ヤマトタケルは叔母の倭姫命(ヤマトヒメノミコト)に「天皇は私に死ねばよいとお思いなのだろうか」と愚痴をこぼす。哀れに思ったヤマトヒメは、ヤマトタケルに草薙剣(くさなぎのつるぎ)と火打石を授けた》(武)。

(STORY) 《「草薙剣の活躍とオトタチバナヒメの身投げ」 相模についた一行は、「悪しき神を退治してほしい」と国造（くにのみやつこ）に依頼される。実はこれは罠であった。国造はヤマトタケルを野に誘い出し、火を放ったのである。この危機からヤマトタケルを救ったのが草薙剣と火打石であった。ヤマトタケルは剣の霊力によって火を退け、火打石で向かい火をつけて国造一味を焼き殺したのである》（同）。

(STORY) 《一行はさらに東に向かった。上総に向かって走水（浦賀水道）を渡ろうとしたとき、船が大嵐にあう。ヤマトタケルの后、弟橘媛（オトタチバナヒメ）は、「海神がお怒りなのです。私が生贄となりましょう」と海中に身を投げる。すると、海はすぐに鎮まりかえった。すっかりおだやかになった浜辺には、オトタチバナヒメの櫛だけが打ち上げられていた。ヤマトタケルは悲嘆にくれつつも陸奥に進み、東北の一族・蝦夷（えみし 東北における朝廷に反抗する一族で、アイヌ人の祖先とする説もある）に戦いを挑んだ。戦いは海上で展開された。ヤマトタケルら一行は、船のへさきに大きな鏡をかけて蝦夷の船団に対峙（たいじ）した。鏡の輝きを見た蝦夷らは「ヤマトタケルは神の子に違いない」と恐れ、なんと戦わずして屈服したのである》（同）。

※ヤマトタケルの死と白鳥

(STORY) 《「ヤマトタケルの残した望郷の歌」 東征を終えたヤマトタケルは、大和へ帰る途中、伊吹山の荒ぶる神を討つことにした。その山中で大蛇（『古事記』は白い猪とする）に出くわすが、「これは神の使いにすぎない。相手にするまでもなからう」と、蛇の体をまたいでしまう。実はこの大蛇こそが、伊吹山の神であった。ないがしろにされた山神は怒り、激しい氷雨を降らせ、一行を打ちすえた。憔悴（しょうすい）したヤマトタケルはなんとか大和へたどりつこうとするが、とうとう伊勢で力尽きる。『古事記』にある、そのときに詠んだ、次の大和を偲ぶ歌は有名である。「倭は国のまほろば たたなづく青垣 山隠れる 倭しうるわし」》（武）。この歌の英訳は、

As for Yamato, the most secluded（隠れた） of lands
— Yamato, retired behind Mount Awogaki
encompassing（囲む） it with its folds（折り重ね）, is delightful.

『The KOJIKI』(TUTTLE PUBLISHING)



(STORY) 《『日本書紀』では知らせを聞いた景行天皇が伊勢（能煩野＝のぼの）で息子の陵

をつくらせたところ、ヤマトタケルの霊は骸（むくろ）から離れ、白鳥となって大和に向かい、琴弾原（ことひきのはら＝御所市）にとどまった。そこにも陵をつくったが、白鳥はさらに河内（古市）に向かったので、そこにも陵をつくらせた。この3つの陵は白鳥陵と呼ばれている。猛々しき父天皇でさえ恐れたヤマトタケルだが、最期まで故郷の大和を愛し、すぐれた歌を残したことから、後の世まで愛される存在となっている》(同)。

《ヤマトタケルの行跡があまりにもドラマチックなため、津田左右吉など多くの学者は「ヤマトタケルは想像上の人物」と考えてきた。熊襲や蝦夷の征伐は複数の人物によってなされ、その話が1つにまとめられたというのだ。確かに、ヤマトタケルが活躍したとされる4世紀の段階では、1人で東西の部族を征討することは難しいことだろう。しかし、大和朝廷の地盤が固まった6世紀頃ならば、それは不可能な話ではない。ヤマトタケルのモデルは、6世紀初頭に実在した有力な王族であった可能性がある》(同)。

成務天皇 (P130)

父は景行天皇。《『記・紀』に載せる成務天皇の旧辞部分の記事は、他の天皇のそれに比して極端に文量が少なく、史実性には疑いが持たれているものの、実在を仮定すればその年代は4世紀半ばに当たると考えられている》(W)。

仲哀天皇 (P131)

《仲哀天皇は実在性の低い天皇の一人に挙げられているが、その最大の根拠は、彼が実在性の低い父（日本武尊）と妻（神功皇后）を持っている人物であり、この二人の存在および彼らにまつわる物語を史実として語るために創造され、記紀に挿入されたのが仲哀天皇であるというのが、仲哀天皇架空説である》(W)。

※仲哀天皇の逝去

(STORY) 《「『熊襲ではなく新羅を討て』という神託」 あるとき、熊襲（くまそ）が朝貢を拒み、謀反をはかっているという知らせが届いた。（仲哀）天皇が橿日宮（福岡市）で群臣を集め熊襲を討つ相談をしていると、神が皇后につき、「熊襲はむなしい地なので征伐するまでもない。海のかなたの金銀あふれる異国を討て。さすれば熊襲はおのずと大王（おおきみ）に従うであろう」と告げた。この異国とは朝鮮半島の新羅（しらぎ）のことである。天皇はそのお告げを疑い、高い山に登って海を見渡したが、それらしき土地は見当たらない。天皇は、后についた神に「海を見渡してみましたが、それらしき国は見当たりません。そもそもあなたは本当に神ですか」とたずねた。神は怒り、お告げを信じなかった天皇は熊襲を討つこともできず、没してしまう。天皇が神の言葉を信じなかったためである》(武)。

※神功皇后の三韓親征

(STORY) 「戦わずして三韓に勝利」 《神功皇后は大臣の武内宿禰（タケシウチノスクネ＝建内宿禰）とともに新羅を討つことにした。対馬を船出した一行を、神々は祝福する。風の神は風で送り、海の神は波で送り、海の中の魚たちは船を運んで支援したのである。船は

人力に頼ることなく新羅まで進み、船団が起こす大波は新羅の国の田畑を水浸しにしてしまった。新羅王は恐れをなし、「今後は大和の天皇の命令に従い、飼部（馬の飼育や調教を行なう部）として仕えましょう」と降参した。これを聞いた高句麗王と百済王も神功皇后を訪ね、降伏の意を表明した。神功皇后は、戦うことなく三韓を服属させたのである》（武）。

《この話は史実にもとづいたものなのだろうか。たとえば、**大和朝廷が地方豪族を征服していった点に関しては、時期はともかく事実であろう。また、海を渡って朝鮮半島で戦闘を繰り広げ、局地的に勝利をおさめることも不可能ではないだろう。しかし、三韓を完全に征服させるほどの国力が当時の大和朝廷にあったかといえば、否というほかない。**かつては、高句麗の「好太王碑文（こうたいおうひぶん＝広開土王碑文）」が、三韓親征が可能であったと裏づける史料とされてきたが、現在では、正確な読みを通じて、**この時代の高句麗が倭（日本）よりはるかに優位にあったことが明らかにされている。**ヤマトタケルの伝説に関しては、史実をある程度はふまえつつアレンジされたものと考えていいだろう。しかし、神功皇后の三韓親征伝説は「大和朝廷が三韓に従えるべきである」という発想、願望が強まった7世紀に創作されたと考えるのが適当である》（同）。

応神天皇 (P139)

（STORY）《「新羅征服後、神功皇后が皇子を出産」 三韓を征服した神功皇后は、九州にいたとき仲哀天皇の子を生んだ。実は新羅に渡る前に身ごもっていて、新羅で産気づいたのだが、「まだ生むときではない」と石を下腹部に巻きつけ、出産を遅らせていたのである。そうして生まれた皇子は、神に祝福された子で、腕にはホムタ（矢を入れる道具）のような筋肉の固まりがあった。そこで皇子は誉田別命（品陀和氣命＝ホムダワケノミコトのちの応神天皇）と名づけられたのである。ホムダワケには兄弟が多く、皇位をめぐる命を狙われる危険性があった。そこで神功皇后は、「生まれた子は亡くなった」という噂を流し、柩を運ぶ喪船で大和に戻った。しかし、ホムダワケは異母兄弟の香坂皇子（カゴサカノミコ）と忍熊皇子（オシクマノミコ）に命を狙われる。2人の異母兄弟は、拳兵の成否を狩りで占うことにした。ところが、2人が狩りを始めると、赤い猪があらわれカゴサカを食い殺してしまったのである。この凶を見たにもかかわらず、オシクマは拳兵した。結局オシクマは、三韓を征した大臣のタケシウチノスクネの軍勢に敗れ、琵琶湖に身投げをした。かくして、ホムダワケは河内を都とし即位した。これが15代応神天皇である。応神天皇の即位後、大陸や朝鮮半島からは、多くの渡来人が文化や技術を持ち込んできた。》（武）。武運の神・八幡神は、応神天皇（誉田別命）の神霊であるとされる。

※オオヤマモリ（大山守命）の反乱

（STORY）《「応神天皇の3人の皇子」 応神天皇の子の皇位継承者として有力なのは、長男の大山守命（オオヤマモリノミコト）、次男の大雀命（オオサザキノミコト）、末っ子の宇遲能和紀郎子（ウヂノワキイラツコ）であった。（中略） 応神天皇は末のワキイラツコをもっとも愛していた。ある日、応神天皇はオオヤマモリとオオサザキを呼び、「お前たちは何人子どもをもうけたが、そのうち兄と弟といずれがかわいいか」とたずねた。オオヤマモリは「上の子が愛おしい」と正直に答えたが、賢いオオサザキはワキイラツコを

愛する父の気持ちを察し、「下の子が愛おしい」と答えた。その答えを聞いた応神天皇は、「皇位はワキイラツコに譲る」と宣言し、オオサザキにその補佐役を、オオヤマモリに山と海の統治を任せるとした。その処遇に不満を待ったオオヤマモリは、応神天皇が逝去してすぐに挙兵し、ワキイラツコを討とうとした。しかしワキイラツコは船頭に変装し、宇治川を渡ろうとしたオオヤマモリを船に乗せ、川の真ん中に落とす。オオヤマモリは溺死してしまった。ワキイラツコは勝利したが、次兄のオオサザキがすぐれた皇子であることを知っていたため、即位しようとはしなかった》(武)。

仁徳天皇 (P155)

(STORY) 《「かまどの煙で民衆の窮状を知る」 ウヂノワキイラツコ (宇遅能和紀郎子) が皇位につくことなく亡くなったため、オオサザキ (大雀命) が仁徳天皇として即位した。『古事記』はここから下巻に入る。仁徳天皇は都を難波の高津宮とし、河内平野で大規模な治水工事を行なった。この治水工事は農業の生産性を高め、都市機能を整えることを目的としたものであったが、一方で大規模な土木工事は民を疲弊させてしまうことにもなった。あるとき、高殿にのぼった仁徳天皇が周囲を見渡してみると、かまどの煙がまったく立っているようすがない。民が大規模工事によって日々の飯も炊けないほど貧しくなってしまったことを知った天皇は、3年間、年貢や工事のための労働を取りやめることにする。そして同時に、自身も宮殿の屋根が雨漏りしても修理することなく、質素な生活を送ったのである。3年後、天皇が再び高殿から国を見渡すと、そこここからかまどの煙が立っていた。民に豊かな暮らしが戻ってきたのである。ようやく仁徳天皇は租税を再開し、国の発展に力を尽くした。これにより、仁徳天皇は聖帝とたたえられることになるのである》(武)。

《聖帝伝説を残した仁徳天皇だが、女性関係では悩みも多かった。天皇は髪長媛 (カミナガヒメ) など、後の磐之媛命 (イワノヒメノミコト) 以外の美しい女性にうつつをぬかし、皇后を怒らせていたのである。こうした人間らしい逸話は、『古事記』『日本書紀』の仁徳天皇以降の部分に目立つようになる。応神天皇以前の大王がまだ神に近い性格を持つものに対し、仁徳天皇以降は人間としての性格を持つ大王に転換するのである》(同)。

田辺聖子著『隼分 (はやぶさわけ) 王子の叛乱』(中公文庫) という小説で、仁徳天皇は有能だが好色で、自尊心あふれる暴君として描かれている。例えば《海辺には、遠い蕃国から漂い流れてくる船の民がやって来て棲み、そして殖え、やがて海辺から平野へ、山へ、と侵略をはじめつつあった。倭は四辺から掠 (かす) められ、攪乱され、飢え、枯れていきつつあった。そういうとき、愚劣な男や、怯懦な青二才に、私は、国を委ねる気にはなれなかったのだ。私は戦った。戦って平和を確保した。水の清澄な、豊穂の八束 (やつか) に垂れるほど、みのり多い国を作ったのは誰だ。私の胸板や背を、太腿を見るがよい。私の傷痕で、私の歴史を知るがよい》(P100)。

次に、自らの陵墓を築かせる重労働を回想したシーン。《竹筒で土を運ぶ役 (えき) 民の列。山腹を幾めぐりして土を盛りあげてゆく長い蟻の行列。先頭は頂きにいて最後はまだ

堀も渡らぬほどの、長い長い列。人々は喘ぎ喘ぎ、神の領域に挑もうとする。遙か離れた二上山から（五十日もかかって）曳いて来た大きな葺石。綱をかけた石を、数百人の男が、あと押し、前曳きする。石の下には丸太が敷き並べられ、石はその上を、重き怒りのごとき音をたてて進む。進む先へ先へと、丸太は並べていかれる。後にある丸太を急ぎ取って前方へ敷いていく作業は、ことにも危険なものだった。事実、すでに一人は滑り落ちる巨岩に阻し潰され、死んだということだった。引綱はどす黒く血に染まっていた》(P89)。

そして、後の磐之媛が嫉妬に駆られて苦しむシーン。《何よりも私は、大王（仁徳天皇）と矢田の郎女（八田若郎女）の持つ愛の時間に心を引き裂かれた。それは、何十年も昔、私と大王が持ったひとときの思い出をまざまざと重ねるためだった。あの矢田の郎女の青い堅い蕾を、昔の私にそうしたように大王は無惨に散らすのであるか、あるいは年たけて老巧になり、好淫になった大王は、楽しみながらゆっくり開花をまつのであるか、私は身悶えして苦しんだ》(P274)。

履中（りちゅう）天皇 (P168)

(STORY) 《仁徳天皇の第一皇子。母は葛城襲津彦の女・磐之媛（いわのひめ）。（中略）即位前に婚約者の黒媛と、大江之伊邪本和気命（＝履中天皇）本人だと偽って通じた住吉仲皇子の反乱を受け、難波宮から石上神宮へ逃げています。その途中、少女に会って、伏兵が居るので、遠回りしろと教えられ、石上神宮で以下の歌を詠んだ。大坂に遇うや嬢子を道問へば 直には告らず当岐麻路を告る（おおさかにあうやおとめをみちとへば ただにはのらずたぎまじをのる）。直とは直越えのこと。直越えとは、後世、生駒山を越える道（直越道）が有名であったが、埴生坂（羽曳野丘陵）から越えようとしているので、現在の穴虫峠付近と考えられる。穴虫峠の手前で出会った乙女に道を聞いたのだが、簡単に越えられるはずの直越え（穴虫峠）ではなく、遠くて、標高も高い竹之内峠越えをしろと教えられた。穴虫峠（二上山の北）は標高約150mに対して、竹之内峠（二上山の南）は標高約300m、しかも数km南に遠い。逃げ込もうとしていた石上神宮は両峠の北東方向にあるのだから、回り道は2倍以上になる。住吉仲皇子反乱の襲撃を受けたとき、難波宮で酒に酔って寝ており、部下に馬にやっと乗せて貰ったくらいだから、恐らく二日酔いで、反乱に驚いていた身には堪えたであろう。これは、まさに王権を受け継ぐための試練であった》(W)。

反正（はんぜい）天皇 (P172)

《仁徳天皇の第三皇子。母は葛城襲津彦の女・磐之媛命。履中天皇の同母弟、允恭天皇の同母兄に当たる。（中略）父仁徳天皇の崩後、叛乱を起こした同母兄の住吉仲皇子を誅殺した。履中天皇2年（401年）に立太子。同6年（405年）に履中天皇が崩御し、翌年（405年）1月に即位。兄弟継承はここに始まる。10月に河内丹比を都とする。天下太平であり、何事もなく在位5年。反正天皇5年（410年）1月に崩御》(W)。

允恭（いんぎょう）天皇 (P173)

(STORY) 《跡を継いだのが、同じく仁徳天皇の子であるヲアサヅマワクゴノスクネ（男浅津間若子宿禰＝允恭天皇）で、大和の遠飛鳥宮（とおつあすかのみや）に移った。このワク

ゴノスクネであるが、実ははじめ即位を辞退していた。病がその理由である。しかし、后や役人などの強い願いから、やむなく即位したのである。そこへ新羅から81隻分もの貢物を届けに遣わされてきた人物が医学に精通していたため、天皇の病気はたちどころに治ったという。こうして78歳という長寿を手にした天皇が残した最も大きな事績は、氏姓の整理である。当時、勝手な名前を名乗っている者が多く存在した。これを嘆いた天皇は、盟神探湯（くがたち）という方法で真偽を正そうとした。これは嘘を見抜くための呪術の一種で、真を述べた者は、湯の中に手を入れても何事もなく、偽りを述べると手が焼けたのだというものであった。こうした功績を残し、ワクゴノスクネは世を去る。允恭天皇と贈名されたこの天皇の死後、大和は再び動乱の時代に入っていく》（坂）。

※衣通姫（そとおりひめ）伝説

（STORY）《記紀伝説のひとつ。ヤマトタケル伝説を『古事記』中の一大英雄譚とするなら、衣通姫伝説は『古事記』中の一大恋愛叙事詩であると言える。（中略）允恭天皇の御世、その子に木梨軽皇子（きなしのかるのみこ）、軽大娘皇女（かるのおおいらつめ）という兄妹がいた。二人の母方の叔母である八田王女は美しい女性で、その美しさが衣を通してあらわれるようだという意味を込めて「衣通姫」と呼ばれていたが、軽大娘皇女もまた叔母に似て美しかったため、同様に「衣通姫」と呼ばれていた。当時は異母きょうだいであれば婚姻も認められていたが、同じ母を持つきょうだいが情を交わすことは禁忌であった。これは、子供は母に属するものであると考えられていたためである。しかし木梨軽皇子は同母妹であるはずの軽大娘皇女に思慕し、やがてその思いを遂げてしまう》（W）。異母兄妹は問題なく結婚できるが、同母兄妹は不義密通になったのである。

（STORY）《ある朝、允恭天皇が朝食を摂ろうとすると、冬でもないのに汁物が凍りついていて。これは不吉だと考えた天皇は、側近の者にこれを占わせる。その者は「身内に良くないことが起こっています。おそらく通じている者がいるのでしょう」と答え、二人の仲は周囲に発覚してしまうのである。（中略）この姦淫、近親相姦を知った群臣は木梨軽皇子から離れて行き、その弟である穴穂皇子（あなほのみこ、後の安康天皇）につく。允恭天皇が崩御した時、本来であれば長子である木梨軽皇子が即位するはずであったが、木梨軽皇子を支持する者はおらず、皆穴穂皇子を支持した。これを知った木梨軽皇子は腹心であった大前小前宿禰（おおまえこまえのすくね）と共謀して穴穂皇子を討とうとするが、逆に追いつめられ、大前小前宿禰の裏切りにより木梨軽皇子は捕えられてしまう》（同）。

（STORY）《その後、木梨軽皇子は四国へ流罪とされることになった。木梨軽皇子は「私は必ず戻ってくるから待っていてなさい」と言い残し流刑地（伊予＝現在の愛媛とされる）へと去ってしまう。（中略）軽大娘皇女は「立てた弓が倒れ、また立ち上がり、再び倒れるように」して兄の元へたどり着く。（中略）木梨軽皇子は再会を喜び、二人はわずかな時間を愛し合うが、やがて二人は自害し物語は幕を閉じる》（同）。

（Attention）軽皇子は3人いた！

ここで整理しておく。古代史において、軽皇子（かるのみこ）と呼ばれた皇子は3人いた。

1. 允恭天皇の第一皇子（皇太子）。上記の木梨軽皇子で、衣通姫伝説に登場
2. のちの孝徳天皇。大化の改新のあと、即位
3. のちの文武天皇。珂瑠皇子（かるのみこ）とも。草壁皇子（天武天皇第2皇子、母は持統天皇）の長男

安康（あんこう）天皇 (P179)

《允恭天皇の第二皇子。母は忍坂大中姫（おしさかのおおなかつのひめ）。雄略天皇の同母兄》(W)。

※目弱王（まよわのおおきみ＝眉輪王）の乱

(STORY) 阿刀田高著『私の古事記物語』（学研刊「CARTA」2012年別冊付録）によると《アナホ（穴穂御子）が皇位を継ぎ、第20代安康天皇となる。天皇となったところで、かわいがっている弟オオハツセ（大長谷王子 のちの雄略天皇）のために許嫁を選んでおこうと考え、「オオクサカ（大日下王）の妹のワカクサカ（若日下王）がいい。弟との婚約を結ばせよう」使者としてネノオミ（根臣）を送った。オオクサカは四たび頭を低くして使者を拝し、「そんな命令もあろうかと思って、妹は外にも出さず大切に育てました。喜んでさしあげましょう」承諾し、みごとな玉かづらを献上品として使者に託した。ところがネノオミが献上品を着服、そればかりか、こともあろうに、「オオクサカはひどいやつです。天皇の願いを断りました。そのうえ、オオハツセなんかに妹はやれない、と……。刀に手をかけて私を追い帰しました」と偽りの報告をした。これを聞いて（安康）天皇は激怒。オオクサカを憎み、殺して、その妻のナガタノオオイラツメ（長田大郎女）を奪い、自分の后とした。ナガタノオオイラツメは前夫とのあいだに生まれた男子マヨワ（目弱王、眉輪王）を連れて安康天皇のもとに入った。マヨワは七歳》。

(STORY) 《ある日、天皇は神を祭って昼寝の床に……。これは悩みごとがあるとき真意を夢に聞くためにおこなわれた習慣だ。目をさまし、「なにか私とのことで不足があるか」と、かたわらに侍る后に尋ねた。悪い神意を聞いたからだろう。ナガタノオオイラツメが答えて「いいえ。厚いご寵愛をいただき、なんの不足がありませんか」「そうか。私のほうには不安がある。マヨワが大きくなったとき、自分の父を殺したのが私であると知って、平気でいられるものかどうか。マヨワが恨みを抱くのが恐ろしい」天皇は知らなかったが、このときマヨワは近くで遊んでいて、この告白を耳にした。「そうだったのか」太刀を取り、天皇の寝ているときを狙って、首を斬り、かねてより懇意の大臣ツブラ（都夫良意富美）の家（奈良市宝来）に逃げ込んだ》(私の古事記物語)。

(STORY) 《允恭天皇の五男のオオハツセは、まだ若年であったが、安康天皇が寝首をかかれたことを知って黙ってははいられない。その天皇は昔から自分をかわいがってくれた兄なのだ。次兄のクロヒコは、「天皇が殺されました。どうします？」と訴えても、クロヒコは煮え切らない。「べつに……」「そんなことでいいんですか。天皇ですよ。私たちの兄ですよ。この意気地なしが」と、クロヒコの衣の襟をつかみ、刀を抜いて斬り殺した。その足で、すぐ上の兄シロヒコのところへ行って事情を訴えたが、この兄もいい加減な対応し

か示さない。「情けない！」ここでも襟をつかんで引きずり出し、生き埋めにした。土が腰まで来たところでシロヒコの両目が飛びだし、そのまま息絶えてしまった》(同)

(STORY)《兄たちはどれも頼りにならない。オオハツセは軍を率いてツブラの大臣の家を囲んだ。大臣の側も応戦して、矢が群がる葦のように飛んでくる。実は、このツブラの大臣のところには、オオハツセが以前に言葉を交わした娘がいる。カラヒメ(訶良比賣)と言う。オオハツセは矢の雨をかいくぐり、大臣の家に近づいて、「カラヒメはいるか」ツブラの大臣が顔を出し、武器を捨て、八度も頭を垂れてから、「カラヒメはおります。さしあげましょう。五つの倉も一緒に献上いたします。しかし、それ以上はなりません。戦えば私か負けるでしょうが、いやしくも天皇の御子が私どもの家に逃げてきたのです。私は死んでもマヨワを守ります」と、家の中へ引き返し、また反撃をしてくる。ひとしきり激しい戦いが続いた。やがて大臣の側の矢が尽き、力も尽きる。ツブラの大臣はマヨワのかたわらににじり寄って、「もう駄目です。どうしましょうか」「仕方ない。死のう」大臣はマヨワを刺し殺し、死を見とどけてから自分の首を斬って死んだ。それにしてもオオハツセの豪気はただごとではない。だれしものが恐れる為政者へとになっていく》(同)。

雄略天皇(P184)

(STORY)《雄略天皇は、即位後も、自分の思い込みだけで身内や配下の者を殺すことがしばしばあり、「大悪天皇」と呼ばれた。しかし、同時に、神をも恐れぬ豪放さが魅力でもあった。たとえばある日、天皇は葛城山(かづらきやま)へ狩りに出かけ、自分に似た姿の大男に出会った。天皇は「神に違いない」と思いつつも強がって「お前は何か」と尋ねた。すると、その者は「名を尋ねるときは自分から名乗るものだ」という。天皇が「私はワカタケノミコ(若建命)です」と名乗ると、大男は「われは葛城の一言主神(ヒトコトヌシノオオカミ)なり」と答えた。その後、天皇は神をもてなし、ともに狩りをして過ごした。こうした神との交流や、経済や外交に力を尽くしたことから、雄略天皇を「有徳天皇」と評する者もあった》(武)

《『古事記』には、雄略天皇が恋多き人物であったことを示す逸話が残っており、天皇による恋の歌も有名である。たとえば、「引田の若栗栖原(わかくるすばら) 若くへに 率寝てましものを 老いにけるかも」という歌は、雄略天皇が引田部のアカキコ(赤猪子)という女性に贈った歌である。天皇は若き日のアカキコを、「いずれ召し寄せるから」と口説いていた。ところがそのまま天皇はアカキコのことをすっかり忘れ、アカキコは80歳になるまで操を守って待ち続けたのである。それを哀れに思って、天皇はこの歌とたくさんの贈り物を贈ったのである。また、吉野で出会った少女を思って詠んだ歌や、『万葉集』巻一の巻頭の「籠(こ)もよ み籠もち」で始まる、野で若菜を摘む乙女に求愛する歌も有名である》(同)。

清寧(せいねい)天皇(P195)

《雄略天皇の第三皇子。母は、葛城韓媛(かつらぎのからひめ)。后妃なし、従って皇子女もなし。(中略) 御名の「白髪皇子」の通り、生来白髪であったため、アルビノであっ

たとみられている。父帝の雄略天皇は靈異を感じて皇太子としたという》(W)。清寧天皇の崩御後、一時、飯豊王（いいとよのおおきみ＝飯豊青皇女、飯豊王女、忍海郎女）が政を執ったので、彼女は「飯豊天皇」と呼ばれることもある。

顕宗（けんそう）天皇 (P199)

※オケとヲケ（意祁命と袁祁命）

（STORY）《雄略失皇ののちに即位した青年（清寧）天皇には、子がいなかった。そのため、天皇の没後、朝廷は各地で天皇家の血を引く男子を探さなくてはならなかった。山部小盾（ヤマベノオダテ）という役人が播磨の国の豪族をたずねたとき、2人の兄弟の召使が歌を歌いながら舞を披露した。弟の歌は「八絃（やつお）の琴を調べたるごと 天下（あめのした）おさめたまいし イザホワケ天皇（すめらみこと）の御子（みこ）市辺の押磐大王（いちべのおしはのおおきみ）の奴（やつこ）の末」言葉でしめくくられた。これを聞いたオダテは、2人が天皇の末裔であることを悟る。オシハノオオキミとは、雄略天皇が狩に誘って射殺した（履中天皇の）皇子である。2人はその息子であり、雄略天皇がオシハを殺した際、わが身の危険を察知して馬飼い・牛飼いに身をやつして逃れていたのである。オダテは2人を都に連れて帰った》(武)。

（STORY）《都についた兄弟は、皇位を譲り合ったが、兄億計王（オケノミコ＝意祁命）による「お前の歌があったからこそこうしてられるのだ」の言葉により、弟・弘計王（ヲケノミコ＝袁祁命）が即位する（顕宗天皇）。2人はそれまでの苦境を振り返り、恩返しと復讐を行なうことにした。まず、逃亡中の自分たちから食料を奪った老人を斬殺し、次に父を殺した雄略天皇の墓を少しだけ掘り返して溜飲（りゅういん）を下げた。墓を壊さなかったのは、かりにも天皇であった者の墓を壊すと、後世のそしりを受けると考えたからである。また、父の骨も探し出し、ていねいに埋葬しなおした。顕宗天皇は在位8年、38歳で逝去し、次に兄が即位した（仁賢天皇）》(同)。

仁賢（にんけん）天皇 (P203)

《清寧天皇が崩じたときに皇位（王位）を弟王と譲り合い、その間飯豊青皇女が執政した。翌年、弟王が即位（顕宗天皇）したが、わずかに在位3年で崩御した。これを受けて、億計王が仁賢天皇元年（488年）1月に即位した》(W)。

武烈天皇(同)

仁賢天皇の子。《『古事記』では、天皇が后も御子もなく没したとされるのみで、その他の事跡はいっさい記されていない。一方『日本書紀』では、武烈天皇の暴君ぶりが記されている》(武)。

継体天皇 (P204)

（STORY）世界大百科事典によると《応神天皇 5 世の孫で父は彦大人（ひこうし）王、母は父の異母妹で垂仁天皇 7 世の孫に当たる振媛（ふりひめ）。近江の高島にいた父が越前の三国にいた母を召し納れて天皇を生んだが、父が早く死んだため、母は天皇を伴って越前

の生家に帰った。その後、『日本書紀』によれば天皇 57 歳のとき、武烈天皇が死んで後継者がなかったので、大連の伴金村が主唱して天皇を越前から迎えて皇位に即け、仁賢天皇の女の手白香（たしらか）皇女を皇后とした。そこで天皇は河内の樟葉（くすは）宮から山背の筒城（つつき）宮、同じく山背の弟国宮などを経て、20 年後に初めて大和に入って磐余（いわれ）の玉穗宮に都したという。（中略）記紀では天皇の死後、天皇の即位以前の子である安閑、宣化両天皇が順次即位し、そのあとに手白香皇后が生んだ欽明天皇が即位したことになっているが、実は天皇の死後直ちに欽明天皇も一方で即位し、宣化天皇の死までの約 8 年間は両朝分立の状態だったとする見方が今日では有力となっており、その場合には天皇の死はなんらかの重大な事変によるものだったとする推測説もある。また天皇の即位については、天皇が応神天皇の 5 世の孫という遠い皇親であること、大和に入るまで長年月を要していることなど、きわめて異例の点が多いので、天皇が別系から出て実力によって旧権力を倒し、新王朝を開いたとする王朝交替説も一部に出されている》。

安閑天皇 (P205) ～推古天皇 (P209)

古事記には、ごく簡単な記録しか載っていないので省略する。天皇陵などは、宮内庁のホームページ「歴代天皇陵の案内」 (<http://www.kunaicho.go.jp/>) などをご覧いただきたい。

〔EPILOGUE〕 古事記の成立をめぐる

終章として、西郷信綱著『古事記の世界』（岩波新書）の「結び 古事記の成立をめぐる」からの引用文を載せておく。引用符《 》は付さないが、見出しを含め、100%同書からの抜粋である。

■神話伝承と大陸文化

中国を源とする大陸文化の波は、非常に古いころから日本列島の岸べを洗っていた。日本が青銅器時代をとびこし、新石器時代からいきなり鉄器時代に移ったのを以てしても、この波がいかに強かったか察知できる。だが、それが波がしらをたてて直接国内になだれこみ、社会を根底からゆさぶるようになるのは六世紀から七世紀にかけてで、そのもっともきわだった事件が大化改新であることは周知の通りである。古事記編纂を動機づけたのも大陸文化のこのゆさぶりである。

すでに高度の成熟をとげていた大陸古典文化の流入は、日本がまだそのなかに生きていた神話的伝統を急速にほりくずし侵蝕する力としてはたらいた。現に大化改新による官僚国家の形成じたい、理論的にも実践的にも、神話の生きる母胎である同族的社会組織の破壊を少くとも志向するものであった。だが、こうした解体的な力のため自己のよってたつ地盤が喪失に瀕しつつあるという状況が、実は逆にあらたな次元での神話の結集をうながす機縁となった。こういう意味で古事記編纂は、**神話が神話として生きる最後の段階を記念した一つの事件**であって、たんに年代的な七世紀の所産ではないことに注目しよう。

ここにはかなり微妙な地理的・歴史的事情もからんでいたはずである。たとえば、もし日本が朝鮮と同じように**中国と地続きであったとしたら、神話伝承は結集されるいとまさえ**

なく、中国文化の波にどっとおし流されてしまっていたであろう。また反対に、その波がもっとおそく、もっとゆるやかにやってきていたとするならば、万葉の抒情詩の代りに神話や叙事詩という野の花がもっとゆたかに生い立っていたであろうと考えられる。むろんこれは想像にすぎないけれど、こうした想像によって逆に古事記の本質を定着させることができる。

古事記が野の花としての神話であるというより多分に政治色に染められた国家的神話へと変容されているのは、また同じことのちがったあらわれだが、地の散文と歌謡との接着がきわめて不十分なままであるのは、急速に崩壊しつつあった古い神話伝承をあらたに上から、しかも相当あわてて編成し直す必要にせまられた消息をものがたる。

■神々の声

書紀が人代の記事を重んじ、それに力を注いでいるのにたいし、古事記は神代に大きな意味をあたえようとする。そしてそこでは、神代の規範的な意味がほとんど神学またはイデオロギーに近づいていっているといえる。

創成神話が宇宙論に及ぶのは自然な成り行きで、その造化神が宗教的に信じられているかどうかは大して問題でないのだが、それにしても「天地初めて発（ヒラ）けし時、高天の原に成れる神の名は、天之御中主（ミナカヌシ）神、次に高御産巢日（タカヒムスヒ）神、次に神産巢日神、云々」という出だしや、次いで天之常立（トコタチ）神とか国之常立神とか、つまり天の中心や国の永遠や生産力等の観念をあらわす神々が最初に成ったというのなど、かなり思弁的だと見なければならぬ。中国の尚書などでも巻首にある堯舜伝説が一等新しいといわれるごとく、とかく巻首には新しいものが加上されやすい。

しかし、語り出しがイデオロギー的であるからといって、すべてをそれで律しうるかといえば、必ずしもそうではない。**国家的な神学やイデオロギーに浸蝕されつつも、神代の物語はとにかくまだ神々の声のこだまする1つの神話的伽藍であった**と思う。

[あとがきにかえて]

ここまで『つぎはぎ古事記入門』にお付き合いいただき、有難うございました。何しろ「つぎはぎ」ですので、神さまの名前にしても、書物によっていろんな書き分けがあり、統一できなくて失礼しました（いろんな書き方に慣れておくのも、大切ですが）。

この小冊子で古事記に興味を持たれた方は、ぜひ本物の『古事記』にチャレンジしていただきたいと思います。原文（変体漢文）の書き下しは岩波文庫から出ていますが、現代語訳でもかまいません。たくさんありますが、たとえば以下のものなど。

阿刀田高著『阿刀田高の楽しい古事記』角川文庫 580円

板坂壽一著『はじめての古事記』日文新書 780円

梅原猛著『古事記』学研M文庫 546円

福永武彦著『現代語訳 古事記』河出文庫 882円

解説書も、1冊持っているとう便利です。



武光誠著『図解雑学 古事記と日本書紀』ナツメ社 1,365円

坂本勝監修『図説 地図とあらすじでわかる！ 古事記と

日本書紀』（青春新書）976円

多田元監修『図解 古事記・日本書紀 普及版』

（西東社）756円

Webでは、以下のサイトが分かりやすいです。

記紀・万葉でたどる奈良 <http://www.pref.nara.jp/miryoku/aruku/kikimanyo/index.html>

神々の国しまね（古事記1300年スペシャルサイト）<http://www.shimane-shinwa.jp/>

これらを参考に、ぜひ記紀ゆかりの地をご自分の足で歩いてみてください。

〔**APPENDIX**〕 奈良県下の記紀ゆかりの地一覧（『探訪 日本書紀の大和』雄山閣刊より）

1. 大和政権誕生

高天原（国生みから天孫降臨）、天香久山（高天原の神々）、菟田（神武東征）、鳥見（長髓彦の抵抗）、橿原（神武の即位）、秋津洲（闕史8代）、三輪山（崇神王朝の出現）、箸墓（初期大和政権）、纏向（崇神王朝と邪馬台国の都）、狭穂（佐紀盾列古墳群の謎）、菅原（埴輪伝承と土師氏）、石上神宮（七枝刀と七支刀）、布留（物部氏の祭祀）、大倭（ヤマトタケルの国しぬび）

2. 大王権の大和

国樺（応神登場）、那羅山（仁徳天皇と磐之媛）、鬨鷄（氷室の里）、磐余（履中天皇と磐余池）、忍坂（大中姫と息長ファミリー）、泊瀬朝倉（雄略天皇）、葛城（一言主神と葛城氏）、忍海（億計・弘計王と飯豊皇女）、和珥（和珥・春日系氏族）、平群（暴君・武烈と平群氏）、桧隈（いまきのあやひと）

3. 飛鳥の時代へ

金橋（継体擁立から「二朝対立」へ）、築坂（朝鮮経営と大伴氏）、坂合陵（欽明天皇と見瀬丸山古墳）、向原・石川（仏教伝来）、広瀬（崇仏・排仏戦争へ）、倉梯（崇峻暗殺、推古女帝の登極）、飛鳥寺（仏教国家へ）、嶋（蘇我馬子）、斑鳩（聖徳太子の斑鳩、若草伽藍、上宮王家の滅亡）

4. 律令国家への歩み

飛鳥板蓋宮（大化の改新）、山田寺（石川麻呂の冤罪）、飛鳥河辺行宮（孝徳帝置き去り）、石上・漏刻（狂乱の斉明朝）、高安城（白村江の敗戦）、多武峰（天智天皇と藤原鎌足）、吉野宮（壬申の乱・上）、上道・中道・下道（壬申の乱・下）、飛鳥浄御原宮（天武天皇の政治・上）、大官大寺（天武天皇の政治・下）、軽市（街のにぎわい）、二上山（大津皇子の悲劇）、真弓・佐田（草壁皇子の死）、薬師寺（持統天皇）、藤原京（律令国家の都城）

（**PART**Ⅱ．終わり）